



新
388
4

東京大学
文学部
図書

ホ
389
4

多部	初丁	は部	六十六丁
ち部	十二丁	ひ部	七十八丁
つ部	十三丁	ふ部	八十三丁
て部	二十六丁	へ部	八十七丁
と部	二十八丁	ほ部	八十八丁
な部	四十丁		
に部	五十八丁		
ぬ部	五十九丁		
ね部	六十一丁		
の部	六十五丁		

古言譯通 秋 目次

因毛我毛とあるハ、高くとトノピアガツテアフムキ望ウ
テ思フ女ヲと云意なるベシ。十二丁十八日、十五日モチ、ヒニ、イニ、シ日出之月
乃、高くとル君座而何物乎加將念とあるハ、高くとト延アガ
ツテアフムキ望ウテ、待タ君ヲ待ツケテと云意ときこ
えとりされバみな高くと云る意ハ同トことなり。本居
氏、高くとハ仰き望む意にて、今の俗も、頸を長クして待
と云、待事の遲をくびが長うなると云ふ同トと云り。

とあるベシコガモ
三卷丁十六よ、人不撓有雲知之、潛為鶯與高部共船上佳十
一丁十八よ、高山尔高部左渡高くと、尔余待公乎、待將出可母

などある高部ハ、今コガモといふ鳥のことなり。天竺
とくユフ、
二卷丁十六よ、多氣婆奴礼多香根者長寸、妹之髮比來不見
尔搔入津良武香又、同人皆者、今波長跡多計登雖言君之
見師髮乱有等母九卷丁廿五よ、葦屋之菟名負處女之八年
兒之片生乃時從小放尔髮多久麻庭尔云、十一十七丁十七よ、
振別之髮乎短弥、青草髮尔多久濫妹乎師曾於母布など
ある多久ハ、ユフと云ことなり。目ハ、
とくふ、ヒツソフ、クラベル、ツレダツ、
四卷丁十八よ、久堅乃、兩毛落、兩乍見於君副、而此日令晚

又二十_六丁_一。草枕_ノ羈行_{君乎}愛見_{副而}曾來_{四鹿}乃濱邊_乎な
どあるハ。ヒツソウテと云意なり。同卷_{二十}九_丁。丈夫毛_如
此戀家流_乎幼婦之戀情_尔比有目_{八方}とあるハ。クラベラ
レハスマイとの意なり。又ツレダツと聞て宜_一き所もあり。
こげクフノム

二卷_{四十}丁_一。妻毛有者_{採而}多宜_{麻之}佐美_{乃山}野上_{乃宇}
波疑_{過去}計良受也_{とあるハ}。摘採_{テク}ハウニと云なり。
皇極_{天皇}紀童謠_{。伊波能杯}休_{古佐}屢渠_{梅野}俱渠_{梅多}
你母_多歲底_{騰哀}囉栖_{歌麻}之_能烏賦_{とありて}。太子傳
曆_{。喫而}令核_{と作り}。雄畧_{天皇}紀_{。十四年}四月_{。天皇}欲

設_五吳人_{。歷問}群臣_曰其共食者_{誰好}乎とあり。俗云_{相伴}人
のことなり。上宮_{聖德}法王帝_說といふものに。太子の嫡
室膳_{大人}の卒_{られ}る時_{。太子}の作賜_{へる}御歌_{。伊我}
留_{我乃}止美_{能井}乃美_豆伊加_{奈久}尔_多義_氏麻_之母_能止
美_{乃井}能_美豆_{とあり}。義_ハの假_字也_用。常_陸国_風土
記_歌。安_良佐_賀乃_賀味_能弥_佐氣_畢多_義止_云くなどあ
る。これらハ飲_{といふ}ことなり。

こげそか
六卷_卅四_丁。玉敷_而待_益欲_利者_多雞_蘇香_仁來_有今夜_四
樂_所念_{とある}。益_ハ衣_四などの二字_{を誤}れるなるべし。

故第二句ハ。マ。タ。エ。シ。ヨ。リ。ハ。と訓べし。玉ヲシイテワザ
ワザ待設ケラレシヨリハ。ヅンジヨラズ來アハセテ。今
日ノ酒宴ニツラナツタガ。カヘツテ興アツテ樂シウオ
モハレル。といふなるべし。

ふ、びて 奉公役ニイソガシウテ

廿卷 四十丁。安可弥佐須比流波多。婢豆奴婆多麻乃欲
流乃伊刀末仁都賣流芥子許礼とあるハ。晝ハ奉公役ニ
イソガシウテ暇ナイ故ニと云意なり。

ふ、はト 十分

二卷 丁。吾王皇子之命乃天下所知食世者春花之貴

在等望月乃滿波之計武跡天下四方之人乃大船之思憑
而天水仰而待尔云々。十三丁。八月。十五月之多田波思家
武登云々などあるハ。御恩ノ天下ニ普ウ十分ニ行トッ
カウト思フテと謂あり。

ふ、いり アリサマ

四卷 四十丁。吾聞尔繫莫言刈薦之乱而念君之直香曾と
あるハ。君ガアリサマソト云意あり。九卷 丁。五十母不
宿二吾齒曾戀流妹之直香仁。十七丁。波之家夜之吉
美賀多太可乎云々。阿比見之米等曾などあるみな同ト。
すべて多太可ハ。人のりへのありさる實事を。此方よて

聞て云ことなり。

二、御立被成 御立被遊

一卷_ハ、朝獵_ニ爾_ニ今立_タ須良_ノ之_シ幕獵_ニ爾_ニ今他_タ田渚_ノ良_ノ之_シ云々

とある立_タ須_ハ立_シの伸_セとる詞_ヨて立_タ賜_ハと云意_{アリ}あり。

俗_ニ今御立_被成_ソウナ或_ハ今御立_被遊_ソウナといふ

と云ことなり。御立_ナサレ或_ハ御立_アソバサレル

と云ことなり。

三、古之七賢人等毛欲_セ為_モ物_ハ者酒_ハ西_ニ有_ラ良_シ師_トあ

る人_等ハ人_カタといふが如_ク十九_五丁_五島_山尔_照在_レ

と云ことなり。

橘_宇受_ル左_之仕_奉者公_卿等とあるハ公_卿ガタといふ

がごとし神_等と云ハ神_様ガタと云ハ同_トをべて某_等

といふみなこの意_{ナリ}。

とちあざりアセリマハリ

五卷_丁十_五立_阿射_里我_乞能_米登_須吏_毛余_家久_波奈_之

尔_云とあるハ俗_ニ心_イらさ_テい_ハよせ_むとは_日

ぐを_あせるといふ_これなる_べしと契_冲云_リアセリマ

ハリ_の意_ナる_べし

とちの_ト刀_ノ切_ツサキ

七卷_丁廿_六一_ノ劍_後鞘_納野_迹葛_引吾_妹云_々とある劍_後ハ

と云ことなり。

と云ことなり。

と云ことなり。

波受豆須流須能多度伎乎之良尔祢能未之曾奈久な
どある多度伎ハ多豆伎又同ト

つタヤス

廿卷一丁ニ於煩呂加尔已許呂於母比豆牟奈許等母於
夜乃名多都奈云々とあるハ先祖ノ名ヲタヤスナとい
ふなり

つづさへ〇つづさはり手トリアス

二卷一丁ニ打蟬等念之時尔取持而吾二人見之云々と
あるハ手トリアウテの謂なり〇八卷二丁ニ妹與吾手
携拂而旦者庭尔出立夕者床打拂云々とある携拂も同

つてタテヨの夕チヤレ

十八丁ニ大伴能等保追可牟於夜能於久都奇波之流
久之米多底比等能之流倍久とあるハ夕テヨ或ハ夕チ
ヤレといふ意なり

つなりるレウケンスルガテンスル承知スル

九卷一丁ニ何為跡欽身乎田名知而浪音乃驟湊之奥津
城尔妹之卧勢流云々とあるハイカヤウニ我身ヲレウ
ケンシテゾの意あり十三丁ニ葦垣之末搔別而君越
跡人丹勿告事者棚知とあるハ事ハ許等零者許等放者

の許等よて。如是の意あり。さて如是ニ承知セヨと事を
令せていへるあり。十七廿九。伊謝美尔由加奈許等波
多奈由比とある。由比も思礼の誤なりと本居氏云。さ
らば十三なるも全同意なり。一卷廿二。其乎取登散和
久御民毛家忘身毛多奈不知云。とあるハ。我身ノダイ
ジナコトラモガテンセズ。ナンニモ打ワスレテ精ヲ出
との謂なり。九卷十八。金門尔之人之來立者。夜中母身
者田菜不知出曾相來とあるも。我身ノナリ行ウコトモ
ガテンセズの意あり。

だふ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

四卷四十。戀二而相有時谷愛寸事盡手四長常念者と
あるハ。アウタトキデモ。或ハアウタトキナリトモと云
意なり。十一二。現直不相夢谷相見與我戀國とあるハ。
夢ニデモ。或ハ夢ニナリトモと云意あり。八卷廿八。事
繁君者不來益霍公鳥汝太爾來鳴朝戸將開とあるハ。其
許デモ。其許ナリトモといふ意なり。二卷廿九。夢尔谷
不見在之物乎鬱悒官出毛為鹿作日之隈回乎とあるハ。
夢ニサへといふ意あり。四卷廿九。奉見而未時太尔不
更者如年月所念君五卷五。斯良農比筑紫國尔泣子那
須斯多比枳摩斯提伊企陀尔母伊摩陀夜周米受云。と云

二卷 廿三 空蟬師神尔不勝者バ離居而朝嘆君テ放居而吾ガ戀君云くとあるハ神様トナツテ天津宮ニ御登リ被遊ニ御供申シタウハアレドモ現身ニシテハ是非ニ及バ子バの意なり。

こへぞ コタヘズ

四卷 四十 月讀之光者清雖照有感情不堪念又五十世間之苦物尔有家良久戀二不勝而可死念者などある不堪ハコタヘラレマイ不勝而ハヨウコタヘズシテと云意なり十卷 五十 吾郷尔今咲花乃女郎花不堪情尚戀ニ家利などあるみな同ト

しまふる 鎮魂祭ヲスル

十五 廿六 多麻之比波安之多由布敝尔多麻布礼杼安我牟祢伊多之古非能之氣吉尔とあるハ朝夕ニ鎮魂祭ヲスレドモの意ときこえり。

こみ マハリ

一卷 廿五 何所尔可船泊為良武安礼乃崎榜多味行之棚無小舟とあるハコギマハツテ行タの謂なり多美多留道或ハ折多武里など云多美もマハルといふことなり。なほ甚多き詞なり。

だみ ホド

十七三四丁十。知加久安良波伊麻布都可太未等保久安良
婆奈奴可乃宇知波云とあるハ二日ホドの意なり。按
古越國の俗語にてありしならむ。

とむけ タウゲ

三卷丁廿四。佐保過而寧樂乃手祭尔置幣者妹乎目不離
相見跡衣十五丁卅一。加思故美等能良受安里思乎美
故之治能多武氣尔多知互伊毛我名能里都十七四丁十。
刀奈美夜麻多牟氣能可味尔奴佐麻都里云とある。
多牟氣ハ今俗云タウゲなり。

とむ タウ 眞 眞 眞 眞 眞

將打ウハウタウ。將待マハマタウと云意なり。

とゆとふ スタク フタメク ウギくスル

二卷丁十六。大船之泊流登麻里能絶多日二物念瘦奴人
能兒故尔とあるハ。フタクシテと云意なり。上よりハ大
船の到る泊。浪の興居のふとくをる意。いひ下し下
よりけとる意ハ。ふとくと心動して物思ふ謂なり。大船
之多由多布見者など云ハ。フタメクヲ見レバの意なり。
又ウギくスルと云意は聞て宜しき所もあり。

とり○とる○とれ タダ
來多利行多利見多利知多利など云ハ。來々行々見々知

夕と云意なり。十八廿五。又、芳理夫久路等利安宜麻蔽尔。
 於吉可邊佐倍波於能等母於能夜宇良毛都藝多利とあ
 るハ、ツイダと云意なり。多流多礼も上よりのか、アよ
 よりて結の異なるのみよて、譯言ハ同トことあり。
 とわ、○とわく、タワムホド、ジツパく、ヒワく、
 多和くハ、等遠くといふも同ト。十卷五十。足引山道不
 知白杜杖枝母等乎、尔雪落者とありて、或云枝毛多和
 多和と注せり。タワムホドと云意なり。或ハジツパくと
 も、ヒワくとも譯すべし。
 ○ち部

ちはひ、御納受
 九卷廿二。衣手常陸國云々。木根取嘯鳴登岑上乎。君尔
 令見者男神毛許賜女神毛千羽日給而云々とあるハ、山
 ニ登ツタ事ヲ神様が御納受メサレテの意なり。十一廿
 丁。靈治波布神毛吾者打棄乞四惠也壽之。恠無とある
 治波布も同ト。
 ちむ、チヨウ、ヂヨウ
 將落と云ハオチヨウ。將朽と云ハ、クチヨウと俗よ云に
 同ト。將濕と云ヂムも、ヒヂヨウと云意よて同ト。
 ○つ部

つ
夕
テ
ル

一卷^ハ山越^ノ乃^ノ風乎^ト時^ト自見^ミ寐夜^ヲ不落^ズ家在^ル妹乎^ヲ懸而^テ小
竹櫃^トとあるハ心ニカケテ慕ウ夕と云意あり夢^ニ見津
と云ハ夢ニ見夕裳裾^ニ濕津と云ハ裳ノスツガ濕夕と云
意^ニよてみな同トことあり○庭^ニ立^タなど云ハ俗^ニ夕テ
ルといふ意あり

つ
あ
へ
コ
ン
リ
ウ

一卷^ハ藤原^ノ之^ノ大宮^ノ都^ノ加^ヘ倍^ス安礼^ノ衝^ノ哉^ト處^ニ女^ノ之^ノ友^ノ者^ト之^ト
吉呂^ノ賀^ノ聞^ノ倍^ノ字^ヲを^シ書^スと^ルハ正^シなり^シこれ^ヲを^シ官^ノ女^ノの^シ給^ス仕^ス
る^コと^トい^フ説^トを^シひ^クこ^トと^トあり^シ宮^ノ仕^ハ宮^ヲ建^立仕^マ

ツルと云ことあり六卷^ハ田跡^ノ河^ノ之^ノ瀧^ノ乎^ト清^ノ美^ノ香^ノ從^ニ
古^ノ宮^ノ仕^ハ兼^テ多^ク藝^ヲ乃^ハ野^ノ上^ニ尔^ト十三^ハ山^ノ邊^ノ乃^ハ五^ノ十^ノ師^ノ乃^ハ原^ノ尔^ト
内^ノ日^ノ刺^ハ大^ノ宮^ノ都^ノ加^ヘ倍^ス朝^ノ日^ノ奈^ノ須^ノ目^ノ細^ノ毛^ノ暮^ノ日^ノ奈^ノ須^ノ浦^ノ細^ノ毛^ノ云^ト
云とあるも皆同意あり又十三^ハ津^ノ礼^ノ毛^ノ無^キ城^ノ上^ノ宮^ノ
尔^ハ大^ノ殿^ノ乎^ト都^ノ可^ク倍^ス奉^ル而^テ殿^ノ隱^ク在^ル者^ト云^ク十九^ハ天^ノ地^ノ
與^テ相^シ左^ニ可^ク延^ス牟^ト等^ト大^ノ宮^ノ乎^ト都^ノ可^ク倍^ス麻^ノ都^ノ礼^ノ婆^ノ貴^ノ久^ノ宇^ノ礼^ノ之^ノ伎^ト
などあるも奉^ルとあるが慇懃^ニいへるのみよて宮仕と
のみいひとるよ意ハ同トさてこれらハ大殿^ノ乎^ト大^ノ宮^ノ乎^ト
などあるよても給仕^スることならず建^立ツカマツル
と云意なることとていよく明^ラけし祈^ヒ年^ノ祭^ノ祝^ノ詞^ト皇^ノ御^ト

孫命能瑞能御舍仕奉底とあるも同ト遷奉大神宮祝詞
ニ廿年尔一遍比大宮新仕奉氏とあるも新ニ建立ツカ
マツ、テの謂ありな古語ニ多シ皆同トことあり

つらへまつる 御奉公申ス ケンジーヤウスル

三卷 一丁 皇祖神之御門外重尔立候内重尔仕奉玉

葛弥遠長祖名文繼往物與云十九 四丁 島山尔照在

橘宇受尔左之仕奉者卿大夫等廿卷 丁 都久之閑尔

弊牟加流布祢乃伊都之加毛都加敝麻都里豆久尔之閑

牟可毛などある仕奉ハ御奉公申スといふことあり○

十九 四丁 天地與久万氏尔万代尔都可倍麻都良牟黒

酒白酒乎とあるハケンジーヤウセンと云ことなり

つのはを 御ツカヒ被成 御ツカヒ被遊 今京より

二卷 丁 吾大王皇子之御門乎神宮尔装束奉而遣使

御門之人毛白妙之麻衣着云とあるハ高市皇子尊人

御ツカヒ被遊夕或ハ御ツカヒ被成夕御門バンノ人モ

と云意なり十三 丁 殿隱ニ在者朝者召而使夕者召

而使遣之舍人之子等者云とあるも朝バンニ御前チ

カウメシヨセラレテ御ツカヒ被遊ソノ御ツカヒ被遊

夕舍人ハと云意なり日本紀推古天皇御歌ニ宇倍之訶

茂蘇餓能古羅烏於朋枳弥能菟伽破須羅志枳とあるハ

大皇ノ御ツカヒ被遊サウナワイと云意なり。抑都^{ツカ}可^カ波^ハ湏^スハ。都^{ツカ}可^カ布^フの伸^ノアと^スる言^ハよて。遣^{ツカ}賜^{タミ}ふといふ意の詞あり。採^{ツム}を伸^テ都^{ツカ}麻^マ湏^スと云ハ。採^{ツム}賜^{タミ}ふといふ意。刈^カを伸^テ可^カ良^ラ湏^スといふも。刈^カ賜^{タミ}ふといふ意。踏^{ツム}を伸^テ布^フ麻^マ湏^スと云ハ。踏^{ツム}賜^{タミ}ふと云意。作^{ツク}を伸^テ都^{ツカ}久^ク良^ラ湏^スといふも。作^{ツク}賜^{タミ}ふと云意なる。いづれも准へて心得べし。さて遣^{ツカ}之^シ賜^{タミ}ふ採^{ツム}之^シ賜^{タミ}ふ刈^カ之^シ賜^{タミ}ふなどやうにいをざるハ。その波^ハ湏^ス麻^マ湏^ス良^ラ湏^ス等の言^ハよ。尊^{ツム}て賜^{タミ}ふと云意をそなへればなり。さてかくさまよ伸^{ツク}云て。尊^{ツム}むことよいふこと。今京よりこの方失^スさる如^クなるれも。いとむく便^{ツク}なきことなり。多^クま

さ。及田刈す取^リ遣^ハすするどやうにいふことハあれども。其^ノ下^ノ人^ハよいひつけて。志^シの令^ヒむる事^ハのみいへり。志^シのれども其^ノも。田刈^リ賜^{タミ}ふ取^リ遣^ハす賜^{タミ}ふなどやう。よ。賜^{タミ}ふといをぬも。もと良^ラ湏^ス波^ハ湏^スなど云^ハよ。賜^{タミ}ふと崇^{ツク}めていふ意を帶^ヒれば。な中昔までも。木のづららよ。其^ノ趣^ハの傳^ハえり。さるゆゑなるべし。高尚^クが伊勢物語新釋^ニよ。どりよつらむすハ。つらはし賜^{タミ}ふと云べきところのやうなれど。此^ノ詞^ハ尊^{ツク}びても。さまふといはぬ詞なり。とて例を引出さるハよし。されど賜^{タミ}ふといをざるそのもとの理を。いなる所^ニ由^ユともわきとめざめるハ。みづ

あらわれともにもひゆるせる人も、寧樂朝よりあなとの詞づゝひのさまにうとくて、そのもとを明らむることのかさゝるハ、うべまぞありける。

つゝのさ 第一バン コツテウ ゼツテウ

十八 廿二 萬調麻都流都可佐等都久里多流曾能奈里波比乎云くとあるハ、諸の貢調の中ニ、稻ハ其長上なるよしにて云るなり。第一バンノ物と云むが如し。或ハコツテウとも譯すべし。四卷 廿二 佐保河乃涯之官能小歷木莫川鳥在乍毛張之來者立隱金とあるハ、岸の長上と云るよて、ゼツテウといふことなり。十卷 四十 高松野

山司之十七 十一 野豆可佐尔今者鳴良武宇具比須乃

許惠古事記雄畧天皇太后御歌ニ、夜麻登能許能多氣知尔古陀加流伊知能都加佐尔云くとある都加佐みな同意あり

つゝのれあひだ〇つゝのま チョットノマ

二卷 十四 大名兒彼方野邊尔薊草乃東間毛吾忘目ハ

十一 廿九 紅之淺葉乃野良尔薊草乃東之間毛吾忘渚

菜などあるハ、チョットノマモの謂なり。四卷 十四 夏

野去小牡鹿之角乃東間毛妹之心乎忘而念哉とあるも

同ト、金葉集ニ、朝日とも月とも日るば東の間も君を

廿卷^{五十}下。須賣呂伎能安麻能日繼等。都藝豆久流伎美能御代^{ヨク}云く。とあるハツイテ、クルシダイヲ追テクルなど云意なり。繼而^{ツギ}來と云ハあらず豆ハ而意と云ハへり。其下^カ多里都藝豆とあるも。語リツイテ、の意なり。

つきくさ ホタルグサ カマツカ アヲバナ チグサ

四卷^卅下。月草之徒安久念可母我念人之事毛告不來七卷^{卅三}下。鴨頭草丹服色取摺目伴移變色登稱之苦沙。あ不多し。今俗國よりて。ホタルグサあるハカマツカあるハアヲバナあるハチグサなど呼^イフ。

つぐらを 御ツクリ被成

一巻^{十一}下。吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎。苜核とある。作良須ハ作の伸^ノとる詞。作^レ賜ふと云意

よて。俗^ニ御ツクリ被成と云ハあされり。

つくほり ヤセスボリ

五卷^{四十}下。漸^ナ可多知都久保里朝^{アサ}伊布許登夜美靈^ミ剋伊乃知多延奴礼云くとある。都久保里ハ契冲ヤセス

ホルと云意ときこゆと云り。

つゝ テサ ナガラ

三卷^{五十}下。吾妹子之殖之梅樹每見情咽都追淨之流と

あるハ心ガムセンデヤナミダガナガレルと云意なり。古
 今集よ春日野よ若菜摘つゝ万代をいとふ心を神ぞ知
 らむとあるも同ト。○十卷^ハ山際^ニ尔^ニ雪者^ハ零管^ニ然為^ハ我
 二此河揚波^ハ毛延^ニ尔家^ニ留可^カ聞^トとあるハ雪ハフリナガラ
 柳ハメグンダと云意なり。古今集よ音羽山音よきくつ
 つ相坂の関のこゑとよ年をふるゝなとあるも同ト。ハ
 卷^{十九}よ春野^ニ尔^ニ安佐^ニ留^ル鳩^ノ妻^ニ戀^ル尔^ニ己^ガ我^ガ當^ル乎^ハ人^ニ尔^ニ令^レ知
 管とある管も乍と云意なり。かくさまに云る都追ハい
 づれも下よ意を含め云残しとるよていもゆるつゝど
 めのつゝなり。上件のごとく詞半よおける都追よ而と

云よ近くて譯言テサるとナガラ意るとの二あり
 その歌の一首を味で考べし。つゝどめの都追ハいづれ
 もナガラ意なりと心得べし。言るハ四卷^ハつゝみなく○つゝまはず○つゝむことなくツゝガナウ

ブナデ

五卷^{卅一}よ都^ニ美^ニ無^ク久^ク佐^キ久^ク伊^イ麻^マ志^シ互^ニ速^ク歸^ル坐^セ勢^セ廿卷^ハ
^{卅八}よ多^ク比^ヒ良^ク氣^ク久^ク於^テ夜^ヤ波^ハ伊^イ麻^マ佐^サ祢^ネ都^ツ美^ニ奈^ク久^ク都^ツ麻^マ波^ハ
^{卅九}多^ク世^セ等^ト云^ク十三^ハよ恙^ニ無^ク福^ク座^ニ者^ハ荒^ク磯^ニ浪^ハ有^ク毛^ニ見^ル登^ト云
 云ると見ゆ恙字ハいづくよても五卷廿卷よ見えとる
 假字書の如くツゝミと訓ことなり。今世よツゝガナウ

といふも、恙之無といふもや、俗よブナデといふ意味
なり。さてこれを都々麻波受とも活用いへり。廿卷
丁、麻湏良男乃許己呂乎母知豆安里米具里事之乎波
良婆都々麻波受可敬理伎麻勢登云くとあり。又都々牟
事無ともをさらるゝ云とあり。廿卷三丁、阿乎宇奈波良
加是奈美奈妣伎由久左佐都々牟許登奈久布祢波々
夜家無續紀廿六詔よ平久幸久都々牟事無など見え
り。兩都々美といふ都々美も同言なるべし。四卷一丁、
石上零十方雨二將關哉妹似相武登言義之鬼尾とある
も。ツ、マ、メ、ヤと訓つべし。さて六卷丁、廿六よ、草管見身疾

不有とあるも、草ハ莫字の誤よて、莫管見なりと本居氏
いへり。
つとミヤゲモノ
三、卷丁廿五よ、伊勢海之奥津白浪花尔欲得裏而妹之家裏
為とあるハ、家へカヘルミヤゲモノニセウと云意なり。
十五丁廿八よ、伊散豆刀尔可比乎比里布等云々。三卷丁三
よ、家妹之濱褰乞者云々。八卷丁廿五よ、道去褰跡廿卷丁二
夜麻都刀曾許礼七卷丁十八よ、欲得褰登などあり。みな同
ト、字鏡よ、昧豆止と見ゆ。抑都刀と云名義ハ、褰物と云こ
とのつばまれるものあり。四卷丁五十八よ、紀女郎褰物贈友

十六 十三 左注に徒贈^ニ褻物^ル東鏡^モも褻物と云もの往^レ往^カ見えたり。

つどふ クワイガフ アツマル ヨリアフ

二卷 廿七 天地之初時^ノ之^キ久堅^カ之^ノ天河原^ガ尔^ニ八百^ヤ万^ホ千^ヨ万^ツ神之^カ神集^ル座^ニ而^テ神分^ル之^キ時^ニ尔^ニ云くとあるハ御クワイガフ被^レ成^テと云意なり。十卷 十二 百^モ磯^シ城^キ之^ノ大^オ宮^ホ人^ヒ者^ハ暇^ヒ有^レ也^ヤ梅^ウ乎^カ挿^カ頭^シ而^テ此^コ間^ニ集^ル有^ルとあるハアツマツテヲル或ハヨリアフテヲルといふ意あり。

つな一 コノシロ

十七 十四 都^ツ奈^ナ之^シ等^ト流^ル比^ヒ美^ミ乃^ノ江^エ過^ガ底^テ云くとある都^ツ奈^ナ

之^シハ今^イ俗^ソコノシロと云魚^イなり。

つね 今^イマデ^テジライも

七卷 三 常^ツ者^チ曾^ハ不^カ念^テ物^モ乎^カ此^コ月^ツ之^ノ過^ガ匿^カ卷^ク惜^シ夕^ヨ香^カ裳^モとあるハ今^イマデ^テハカタカラ何^{ナニ}トモ思^フハヌコトヂヤと云意なり。續紀廿八詔^ニ大^オ瑞^シ波^ハ聖^ヒ皇^ミ之^ノ御^ミ世^ヨ尔^ニ至^リ德^{トク}尔^ニ感^ケ天^{アメ}地^チ乃^シ示^シ現^ル之^ノ賜^メ物^{モノ}止^ム奈^ナ母^モ常^ツ毛^モ聞^ク行^ク湏^スとあるも同ト又ジライとも譯すべし。

つばらの 子^コヲ入^レテ

一卷 十三 味^ウ酒^サ三^ミ輪^{リン}乃^ノ山^{ヤマ}云^ク委^ツ曲^カ毛^モハ^ル見^ミ管^ツ行^ク武^ム雄^ユ數^ス毛^モ見^ミ放^サ武^ム八^ハ万^{マン}雄^ユ云^クとあるハ俗^ソコノ念^ニヲ入^レテ見

テ行ウモノヂヤニと云意なり。九卷^{廿二}。筑波嶺乎清^{ツツハチノカミ}
照言借石國之真保良乎委曲尔示賜者とあるハノコル^{テラシイフカキシクニノマホラフネラカニシシタミ}
トコロナウ御見セ被成タレバと云意なり。十九^{十一}。
奥山之八峯乃海石榴都婆良可尔今日者久良佐祢丈夫^{オクヤマノハツツノノウツバシラカニイフハクハラサネウツラフ}
之徒とあるハ。殘ルトコロナウ宴樂ヲ極メ盡シテ今日^{ノトモ}
一日ヲ御暮被成ヨとの意なり。

つまむ ツマツシヤル 御ツミ被成

一卷^七。此岳尔菜採須兒云く十七^{廿七}。乎登賣良我^{ヲトメラガ}
春菜都麻須等云くなどある。都麻須ハ採の伸アとる詞^{ハルナツトス}
よて採賜ふと云意なり。俗ツマツシヤル。或ハ御ツミ

被成と云よあされり。

つみ ツメル ツマム

十七^{十七}。餘呂豆代等許己呂波刀氣底和我世古我都^{ヨロヅトコハトケテワガセコガツ}
美之乎見都追志乃備加祢都母とあるハ。拊ツタヲ見ナ^{ミシヲミツツ}
カラと云意なり。廿卷^{廿六}。美母乃須蕪都美安氣可伎^{ミモノスワツツミヤカキ}
奈塗とあるハ。拊ツタニ舉ゲの意なり。古今集俳諧よ。秋くれむ
野べよあむる。女花郎いづれの人らつまで見るべき。
又春霞棚曳野への若菜よむなり見てしかな人もつむ
やと。千載集俳諧よ。六波羅密寺の講の導師よて。高座よ
のぼるちとよ。聽聞の女房。足をつみ侍ければよめる。良

多く連りうへる貞よて、ダイブンウカウダ。或ハカズ
カズウカウダといふ意なり。古事記仁徳天皇、大御歌、
淤岐幣迹波、袁夫泥都羅、玖とあるも、あずくの船の連
り浮びとる形を詔へるなり。玖ハ可伎久氣と活用あり
辞よて、枕よもるを、枕可牟、枕良久、蔓よもるを、蔓可牟、蔓
良久などいふ類なり。十九、廿、布勢乃海、小船都良奈
米とあるハ、連祢を伸とるあり。

つる○つれ タ テル チル
來都流行都流見都流などいふも、來タ行タ見タといふ
意なり。○隔流ハ、俗よへダテル、出流ハ、俗よイデルとい

ふことなり。落流ハ、俗よオチル。朽流ハ、俗よクチルと云
ことなり。都礼も、許曾のか、里によりて、結詞の異なる
のみよて、譯言ハ同ト。

つれもなき 世上ウトイ
二卷 二、何方尔、御念食可、由縁母無、真弓乃崗尔、宮柱
太布座云く、三卷 四、都礼毛奈吉、佐保乃山邊尔云く、
十三、津礼毛無、城上宫尔云く、などあるハ、世上ウ
トイと云意よきこえり。六卷 十四、忍照難波乃國者、
葦垣乃古郷跡、人皆之、念息而都礼母無有之間尔云く、と
あるも同ト。

べい。

てば 夕ナラ

十五 丁十八よ。安伎波疑尔。く保敞流和我母。奴礼奴等母伎

美我美布祢能都奈之等理豆婆。十七 丁廿七よ。安之比奇能

夜麻左久良婆奈比等目太尔。伎美等之见底婆。安礼古非

米夜母などあるハ。トツ夕ナラ。三セ夕ナラと云意なり。

てぶり ナリフリ

五卷 丁廿六よ。阿麻社迦留比奈尔伊都等世。周麻比都く。美

夜故能提夫利和周良延尔家利とあるハ。都ノナリフリ

と云意なり。風俗のことなるべし。袖中抄。左京兆歌よ。う

き身よハ都のでぶりてをられて。ひなへさそをむあづ

まづもがな。

てむ○てめ テヨウ ウ

將泊ハ。俗よハテヨウ。將黄變ハ。俗よモミテヨウといふ

意あり。將出あど云テムも。俗よイデヨウと云意よて同

ト○榜氏牟ハ。俗よコガウ。依氏牟ハ。俗よヨセウといふ

意なり。氏米も。許曾のか。それ結びの異なるのみよて。

譯言ハ同ト。

てもをまに。セイダイテ。心勞シテ。テモヤスメズ

八卷 丁廿一よ。戯奴之為吾手母。須麻尔。春野尔。拔流茅花曾。

御食而肥座とあるハ、セイダイテといふ意あり。同卷
三、テ手母須麻尔、殖之芽子尔也。還者、雖見不飽、情將盡と
あるハ、心勞シテと云意、或ハ手モヤスメズシテと云意
なり。

てる○てれ タ

持有といふを、モツタ、立有といふを、タツタと云意あり。

氏礼も譯言ハ同ト。

○と部

トシテ、トナツテ、トテ、ト、モニ、トアル

トアツテ、サア、テテ、ヲモツテ、ニヨツテ

二卷廿六。宇都曾見乃人尔有吾哉。從明日者。二上山乎。
弟世登吾將見とあるハ、吾兄トシテ見ヤウと云意あり。
同卷廿九。御立為之島乎。母家跡住鳥毛荒備勿行年替。
左右又四十。奥波來依荒磯乎。色妙乃枕等卷而奈世流君。
香聞六卷廿一。刺竹之大宮人乃家跡住佐保能山乎者。
思哉毛君十四。一。信濃奈流知具麻能河泊能左射礼。
思母伎弥之布美氏婆多麻等比吕波牟。これらみな同意
なり。一卷廿九。拷乃穗尔夜之霜落磐床等。川之水凝云。
云とあるハ、磐床トナツテと云意なり。二卷廿六。久堅
乃天宮尔神隨神等座者云々。三卷五十。足氷木乃山邊

乎指而晚闇跡隱益去礼云、十七九、烏梅乃花美夜萬
等之美尔安里登母也如此乃未君波見礼登安可尔氣牟
古事記中卷神武天皇條、宇泥備夜麻比流波久毛登韋
由布佐礼婆加是布加牟登曾許能波佐夜牙流古今集、
今日來ずハ明日ハ雪とぞふりなまし、などあるみか同
ト○一卷、丁、熨田津尔船乗世武登月待者潮毛可奈比
沼今者許藝豆菜とあるハ、船ノリセウトテと云意なり、
をべて古言ハ、登豆と云ることあり、今京よりこあ、
り等とのみ云ふ登豆の意を具されバなり、延喜式鎮火
祭詞、古言ハあることあり、これを同卷、丁、十九、神佐備世須登云
除て古言ハあることあり、これを同卷、丁、十九、神佐備世須登云

云、高殿乎高知座而云、山神乃奉御調等春部者花挿頭
持云、大御食尔仕奉等上瀬尔、鶺鴒川乎立云、又、廿二、其
乎取登散和久御民毛云、又、廿四、亦打山行來跡見良武
二、卷、丁、十三、倭邊遣登佐夜深而などかぞへ、これ
らの等ハ、みかトテの意なり、○高山與耳梨山與相之時
立見來之伊奈美國波良とあるハ、高山ト耳梨山ト共ニ
と云意なり、同卷、丁、廿六、弟日娘與見礼常不飽香聞二卷
丁、二、君與時、幸而三卷、丁、十六、鶯與高部共船上住、五
卷、丁、九、余知古良等、手多豆佐波利提云、などある、みな
同ト、枚舉べのらず、○五、卷、丁、五、大王能等保乃朝廷等、斯

良農比筑紫國爾云々ハ遠ノ朝廷トアルノ謂あり十五
丁三ノ須賣呂伎能等保能朝廷等可良國爾和多流和我
世波云々十八廿九ノ於保伎見能等保能美可等云々
美由伎布流古之爾久太利來云々これらみか同意あり
十八十八ノ高御座安麻能日繼登須賣呂伎能可未能美
許登能伎己之乎須久爾能麻保良爾云々とあるハ天ノ
日繼トアツテノ謂あり同卷丁廿二天乃日嗣等之良志久
流伎美能御代云々又丁廿二多可美久良安麻能日繼
等天下志良之賣師家流云々十九廿九ノ所知來流天之
日繼等神奈我良吾皇乃天下治賜者云々廿卷丁五十一須

賣呂伎能安麻能日嗣等都藝豆久流伎美能御代云々云
云これら皆同意あり○十四十四ノ志母都氣努安素乃
河泊良欲伊之布麻受蘇良由登伎奴與奈我已許呂能礼
又丁三可奈刀田乎安良我伎麻由美比賀刀礼婆阿米乎
方刀能須伎美乎等麻刀母廿卷丁一由古作枳尔奈美奈
等惠良比志流敵尔波古乎等都麻乎等於枳豆等母枳奴
又丁四阿良之乎乃伊乎佐太波佐美牟可比多知可奈流
麻之都美伊壘豆登阿我久流これら曾の辞と通ひま
曾の辞と似てかるきもあり共と譯語ハサアとあされ
り十四丁十二ノ伊香保呂爾云々比等登於多波布云々の

歌その下は再出さるるハ。比等曾於多波布とあり。これを正しく曾は通しさるを知ぬ。○三卷四十丁。逆言之狂言等可聞。高山之石穗乃上尔。君之卧有とあるハ。續紀宣命。天皇詔旨止勅大命と多くある止は同トクニテといふ意あり。されバ狂言にて高山の云くは君が卧せら歟と謂なるべし。同卷五十丁。逆言之狂言登可聞。白細尔舍人装束而云く。十七廿一丁。多婆許登等可毛とある。みな同ト。又これらの言等ハ。言とのみいふは同ト。と云説あり。十九廿九丁。玉梓之道尔出立。往吾者公之事跡乎。負而之將去とあるハ。言を言跡といへりときこえ

とこり。猶考べし。○十六十三丁。左耳通良布。君之三言等。玉梓乃使毛不來者。云くとあるハ。君が御言ヲモツテの謂ときこえとこり。○十九廿六丁。住吉尔。伊都久祝之。神言等。行得毛來等毛。舶波早家無とあるハ。神言ニ因テと云ふどの意ときこえとこり。
とこり。タヲカゲ
八卷廿三丁。物部乃石瀬之杜乃。霍公鳥。今毛鳴奴。可山之常影尔。十卷四十丁。足日木乃山之跡。陰尔。鳴鹿之聲。聞為八方。山田守。酢兒などあり。本居氏云。常影ハ。夕ヲ陰なり。山のとこり。みとる所を。とをとも。とこりとも云といへり。

とむむ ナンジル

四卷^{四十九}下。足引^{アシヒキ}乃山^{ノヤマ}二四^{ニシ}居者^{イバ}。風流^{フウリウ}無三^{ナミ}。吾^ワ為流^ワ和射^{ワザ}乎。
害目^{ガイメ}賜名^{タナヘ}とあるハ。御ナンジ^{ミナンジ}アソバサルナといふ意なり。古事記上卷^{コトシキ}下。故^{レドモ}雖然^{シカスレ}為天照大御神者^{アマテラス}。登賀^{トガ}米受^{メメ}而告^テ云く。とも見えたり。

ときづく トキナラズ

三卷^{三十七}下。天地^{アメノチ}之云く。時^{トキ}自久曾^{ヨクソウ}雪者^{ユキハ}落家留^{フリケル}とあるハ。何時^{ナニトキ}トイフ定マリモナウ時^{トキ}ナラズと云意なり。非時^{ヒトキ}不時^{ナニトキ}など書て。みなトキジクとよめる。其意なり。とくら^{トクラ}トヤ^{トヤ}トキナラズ

二卷^{二十九}下。鳥峙^{トクラ}立^{タテ}飼^{カヒ}之^ノ鴈^{ガリ}乃^ノ兒^コ栖^ス立^{タテ}去^キ者^ハ檀崗^{マンノカ}尔^ニ飛^{トビ}反^カ來^リ年^ネ十九^{ジュウ}下。枕^{マクラ}附^{ツク}都麻屋^{ツマヤ}之内^{ノウチ}尔^ニ鳥^{トクラ}座^ユ由^ヒ比^ヒ須^ス惠^エ豆^{マメ}曾^{ソウ}我^ガ飼^{カヒ}真^{マコト}白^{シラ}部^フ乃^ノ多^{タカ}可^カる^カとあるハ。今俗^{イマノクニ}云^{イハ}鳥^{トクラ}屋^ヤなり。拾遺集^{シツイシツ}云^{イハ}松^{マツ}が枝^エのかよへる枝^エを鳥^{トクラ}座^マにて。栖^ス立^{タテ}らるべき鶴^{ツル}のひな^{ヒナ}らふ。和名抄^{ワナヒナ}云^{イハ}孫^{ムコ}愼^シ切^キ韻^{オン}云^{イハ}穿^ス垣^{カキ}栖^ス鷄^{トリ}曰^{イハ}峙^{クラ}和名止^{ワナヒナ}久^{キウ}良^ラとあり。

とこなめ サイ

一卷^{十九}下。雖^{シレド}見^ミ飽^{アカ}奴^ヌ吉野^{ヨシノ}乃^ノ河^{カハ}之^ノ常^{トコ}滑^{ナメ}乃^ノ絶^タ事^{コト}無^{ナク}久^{キウ}復^{マタ}還^{カヘリ}見^ミ牟^ムとあるハ。常^{トコ}を底^{ソコ}と通^トへバ。底^{ソコ}滑^{ナメ}の意^イにて。そハ水^{ミヅ}底^{ソコ}の石^{イシ}など生^ハ著^{ツキ}るものにて。今俗^{イマノクニ}云^{イハ}サイといふもの

なり十一十四。豊泊瀬道者常滑乃恐道曾云く九卷十一。
丁二。入出見河乃床奈馬尔三雪遺云くなどあるみな同
じ。

どち ドウシ

八卷九。鶏鳴古郷之秋茅子乎思人共相見都流可聞

とあるハ思フ人ドウシと云むお如し思ふ度知旅別る
度知うま人杼知なども多くいへり。

どいろ ○どい ドロく ドロツク ドンド

四卷廿二。伊勢海之磯毛動尔因流浪恐人尔戀渡鴨と

あるハ磯モドロくトナリ響イテヨスル浪と云意なり。

或ハドロツイテヨスル浪ともドンド、ヒバイテヨス

ル浪とも聞べし。六卷廿二。佐保乃内尔遊事乎宮動く尔

又四十。山裳動響尔左男鹿者妻呼令響十一。瀧毛

響動二。十八廿七。佐刀毛等騰吕尔十四。伊波毛等

杼吕尔於都流美豆などある。みな同ト鴨長明海道記。

磯もどいろよる浪ハ水口のまびをくと見えたり。

催馬樂浅水よ安左牟川乃波之乃止く吕くく止不利

之安女乃とも見ゆこれを等騰吕久等騰吕可湏などを

とらるゝ云ること多し。神代紀。鼓盪と見え字鏡よ

替止く吕久。閑閑丙三形同止く吕久。砒礩止く吕久。轟止

止呂久吸碓止呂久など見え古事記石屋戸條よ伏汗
 氣而踏登杼呂許志古今集よ天原踏とゞろろ一鳴神も
 源氏夕貌卷よこちくと鳴神よりわたどろく一踏と
 どろろをからうすの音もなど見えとり。○十一丁_{セハ}よ
 馬音之跡杼登毛為者とあるもドロくスレバと云意小
 て同ト。

どびみ トビヒ

九卷_{丁セハ}よ牡牛乃三宅之泊尔云く夕塩之満乃登等美
 尔三船子呼阿騰母比立而喚立而三船出者云くとある
 夕の十分よみちよへとるを云今も土左人ハ潮汐

の堪へところを常よトビヒと云り登蓮法師集よ淡路島
 汐のどびひを待ちとは涼しくなりぬせとの夕風とあ
 り

どのふ ヨビアツメル

二卷_{丁卅四}よ御軍士乎安騰毛比賜齊流鼓之音者云くと
 ある齊流ハ御軍ヲヨビアツメルと謂なり字鏡よ擘調
 入率下人也止乃不とあるが如しあるを岡部氏の
 鼓吹調練のことよときあせらむいみきひがことあ
 り三卷_{丁十二}よ網子調流海人之呼聲十九_{丁卅九}よ物乃布
 能八十友之雄乎撫賜等登能倍賜云く廿卷_{丁十八}よ安之

我知流難波能美津尔大船尔末加伊之自奴伎安佐奈藝
尔可故等登能倍云く又廿八夜蘇加奴伎可古登能
倍豆安佐婢良伎和波己藝塗奴等云くなどあるも皆同
意なり十卷廿九左男鹿之妻整登鳴音之云くとある
も鹿の妻ハ一匹にかぎるべうらねバヨビアツメルと
謂なるべし續紀廿五詔又竊六千乃兵乎發止く乃比
とあるも同ト續後紀十九興福寺僧長歌も行布人乎調
と見え舒明天皇紀卯始朝之己後退之因以鐘為節と
ある節をトノヘと訓るもヨビアツメルと云意よて
いへり

とほしろしヒロウテセイジヤウナ
三卷廿九明日香能舊京師者山高三河登保之呂之云
云十七四丁二山高美河登保之呂思云くなどあるハ河
ノヒロウテセイジヤウナと云意と見えとリ登保ハ遠
よて見ると一の遠く寛あるより云之呂之ハ御火白く
焼などいふ白よて明白なるより云て清き意なり長明
無名抄俊惠定歌體事を云る處よすがとらるハくき
よげよいひくごしてけとらるとちろきあり云くこ
れハそとめの歌のやうよかぎりなくとちろくなど
そあらねというよさをやめなり云くをとめ此歌のす

あさきよげよとわしろければ云くなど見えたり。

とよ ウチニ

十卷 六丁 吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深

刀尔とあるハ俗ニ夜ノ更ヌウチニと云意なりと本居

氏云り十五 廿三丁 古非之奈奴刀尔十九 十四 左欲

布氣奴刀尔 廿卷 三丁 佐久良波奈知利加須疑奈牟和

我可敵流刀祢 日本紀繼體天皇卷歌 于魔伊祢矢度你

你播都等咧 柯替播難俱難梨などあるも右ニ准べし

どのる シユクバン 御夜詰

二卷 廿九丁 外尔見之檀乃岡毛君座者常都御門跡侍宿

為鴨又 同橋之島宮尔者 不飽鴨佐田乃岡邊尔侍宿為尔
往などある侍宿ハ俗云宿番のことなり或ハ御夜詰と
聞て宜しき所もあり

とみ アトミ

六卷 十四丁 見芳野乃飽津之小野笑野上者跡見居置而

御山者射日立渡朝獵尔十六履起夕狩尔十里躡立云く

とあるハ獵狩のとき鳥獸の跡をもとめ見る人を跡見

と云也

ともく ウラヤマシウ メヅラシウ スクナウ

マレナ

一、卷^{丁廿四} 二、藤原之^{フチハラノ}大宮都加倍^{オホミヤツカヘ}安礼^{アレツクヤ}衝哉^{ヲトメガ}處女之友者^{ガトヒハトモシ}之
 吉呂^{キロカ}賀聞^{カモ}とあるハ、藤原ノ大宮ヲコノタビ新ニ御作事
 ツカマツ、テサテ御側近ウ御奉公申上ル官女ノトモ
 ガラノサテウラヤマシイコトカナとなり。同卷^{丁一}
 朝毛^{アサモ}吉木^{ヨシキ}人^{ヒト}之^{トモシ}母亦打山^{マツヤマ}行來^{ユキク}跡見^{トミ}良武^{ラウム}樹人^{キヒト}友師^{トモシ}母^モ三卷
 卅三^{ササ} 二、武庫^{ムク}浦^{ウラ}乎^フ榜^{フネ}轉^{タム}小舟^{コフネ}粟^{アハ}島^{シマ}矣^フ背^セ尔^ニ見^ミ乍^ツ之^{トモシ}小舟^{コフネ}四卷
 卅七^{サシ} 二、家^{イヘ}二^ニ四手^{シテ}雖^レ見^ド不飽^ヌ乎^フ草枕^{クサマクラ}客^客毛^モ妻^{ツマ}與^ト有^ル之^{トモシ}左^サ五
 卷^{丁廿二} 二、麻^マ都^ツ良^ラ河^カ波^ハ多^タ麻^マ斯^シ麻^マ能^ノ有^ウ良^ラ尔^ニ和^ワ可^カ由^ユ都^ツ流^ル伊
 毛^モ良^ラ遠^ラ美^ミ良^ラ牟^ム比^ヒ等^ト能^ト等^ト母^モ斯^シ佐^サ六卷^{丁十八} 二、島^{シマ}隱^{カクリ}吾^ワ榜^{フネ}來^ル
 者^バ之^{トモシ}羸^{ヒヤカ}倭^{ヤマト}邊^ヘ上^ノ真^マ熊^{クマ}野^ノ之^ノ船^{フネ}ま^ま朝^{アサ}波^ハ海^{ウミ}邊^ヘ尔^ニ安^{ヤス}左^サ里^リ

為^シ暮^ユ去^{サレ}者^バ倭^{ヤマト}部^ヘ越^ユ雁^{カシ}四^シ之^{トモシ}母^モ七卷^{丁十五} 二、足^{アシ}柄^{ガラ}之^ノ管^{ハコ}根^ネ飛^{トビ}超^{コエ}
 行^ユ鶴^{ツル}乃^ノ之^{トモシ}見^ミ者^バ日^{ヤマト}本^ト之^シ所^{オモ}念^{ホユ}ま^ま之^{トモシ}妹^{イモ}尔^ニ戀^{コヒ}余^{アガ}越^ユ去^ケ者^バ勢^セ
 能^ノ山^{ヤマ}之^ノ妹^{イモ}尔^ニ不^ズ戀^テ而^{アル}有^ガ之^{トモシ}左^サま^ま之^{トモシ}同^{ドウ}吾^ワ妹^{イモ}子^コ尔^ニ吾^ワ戀^{コヒ}行^ユ者^バ
 之^{トモシ}雲^{クモ}並^{ナニ}居^ル鴨^{カモ}妹^{イモ}與^ト勢^セ能^ノ山^{ヤマ}八卷^{丁十九} 二、吉^{ヨシ}名^ナ張^{ハリ}乃^ノ猪^{イノ}養^{カヒ}山^{ヤマ}尔^ニ
 伏^{フス}鹿^{シカ}之^ノ孀^{ツマ}呼^コ音^ネ乎^フ聞^ク之^ガ登^ト聞^モ思^シ佐^サ七卷^{丁廿五} 二、久^{ヒサ}方^{カタ}之^ノ天^{アマ}漢^{ガハ}
 原^{ハラ}丹^ニ奴^ヌ延^エ鳥^{トリ}之^ノ裏^{ウラ}歎^{ナゲ}座^{マシツ}津^ツ之^{トモシ}諸^{シヨ}手^テ丹^ニ十五卷^{丁十八} 二、由^ユ布^フ豆^ツ久^ク
 欲^{ヨク}可^カ氣^ケ多^ク知^チ與^{ヨリ}里^リ安^ヒ比^ヒ安^マ麻^マ能^ノ我^ガ波^ハ許^コ具^グ布^フ奈^ナ妣^{ヒト}等^ト乎^フ見^ミ流^ル
 我^ガ等^ト母^モ之^シ左^サ十七卷^{丁廿七} 二、夜^ヤ麻^マ夫^フ积^キ能^ノ之^シ氣^ケ美^ミ登^ト毗^ヒ久^ク鷺^{シロ}
 能^ノ許^コ惠^エ乎^フ聞^ク良^ラ牟^ム伎^キ美^ミ波^ハ登^ト母^モ之^シ毛^モま^ま之^{トモシ}四十卷^{丁四十} 伊^イ末^マ太^タ見^ミ奴^ヌ
 比^ヒ等^ト尔^ニ母^モ都^ツ氣^ケ牟^ム於^オ登^ト能^ノ未^ミ毛^モ名^ナ能^ノ未^ミ母^モ伎^キ吉^キ底^チ登^ト母^モ之^シ夫^フ

流我祢世卷一四十一。佐伎母利尔由久波多我世登刀布比
登乎美流我登毛之佐毛乃母比毛世受ちどあるみな同
ト○六卷十一。味凍綾丹之敷云く三芳野之云くとあ
るハアヤシイマデニ賞ラシウと云意あり同卷十二。
足引之云く芳野河之云く每見文丹之八卷十九。誰聞
都從此間鳴渡雁鳴乃孀呼音乃之知左寸九卷十二。妹
當茂刈音夕霧來鳴而過去及之又十五。欲見來之久毛知
久吉野川音清左見二友敷十七十七。伊美豆河泊美奈
刀能須登利云く等母之伎尔美都追須疑由伎云く又十四
丁二曾己乎之母安夜尔登母志美之怒比都追安蘇夫佐香

理乎云く廿卷廿五。夜麻美礼婆見能等母之久可波美
礼波見乃佐夜氣久云くなとあるみな同ト○四卷廿一
。難波方塩干乃名凝飽左右二人之見兒乎吾四之毛と
あるハジブンハ見ルコトノスクナイコトカナ又ハジ
ブンハ見ルコトガマレナコト哉と云意なり十卷五。
梅花開有崗邊尔家居者之毛不有驚之音又廿五。己嬾
乏子等者竟津荒磯卷而寐君待難又廿六。戀敷者氣長物
乎今谷之牟可哉可相夜谷又卅一。戀日者氣長物乎今夜
谷之應哉可相物乎又四十。秋芽子之散過去者左小牡鹿
者和備鳴將為名不見者之焉又廿五。八千矛神自御世之

嬬人知尔来告思者又四十山遠京尔之有者狭小牡鹿之
妻呼音之毛有香又九十戀乍裳稍葉搔别家居者之不有
秋之暮風十一一無心爾毛有鹿人目守之妹尔今
日谷相乎十四二佐可故要氏阿倍乃田能毛尔為流
多豆乃等毛思吉伎美波安湏左倍母我毛十七三多
麻尔奴久波奈多知婆奈乎等毛之美思己能和我佐刀尔
伎奈可受安流良之十八四奈尔之可母安吉尔之安
良称波許等騰比能等母之伎古良云云十九一語左
氣見左久流人眼之等於毛比志繁云云とあるみか同
ト

とよむ ウドム ドンド、イフ ドヨメク
四卷 山跡邊君之立日乃近付者野立鹿毛動而曾
鳴とあるハ俗よウドムと云ことなり或ハドンド、イ
フともドヨメクとも聞て宜しき所あり
とりて タヒラゲテ
六卷 二千万乃軍奈利友言舉不為取而可來男常曾
念とあるハ平ゲテモドツテ來ベキとの意なり捕て率
て來ることハ非む
とを ジツバク ヒワクタワムホド
八卷 秋芽子乃枝毛十尾二降露乃消者雖消色出

目八方十卷十三。為垂柳十緒なともありて。ジツパジツパと撓み靡く貌を云詞ときこえさり。或ハヒワクトタワムホドとも聞べし。同卷五十。白杜材枝母等乎九。尔とありて。或云枝毛多和と見ゆ。源氏物語竹川。今一所ハリ花紅梅御くいろよて。柳の糸比やうあををくと見ゆ。浮舟小こめきたちとあまををくと見ゆ。れどけさうり世のありさまをも志る方をくなくて。おふしとてさる人よあはむなどあるあををくも同ト言よて。登遠多遠多和と通云しなるべし。シナヤカナとをよる。

二卷四十。秋山下部留妹奈用竹乃騰遠依子等者云々。
三卷四十。名湯竹乃十縁皇子。狹丹頬相吾大王者。あとのあるハシナヤカナと云意あり。この登遠も上の枝母登遠と同言よて。多和多遠と通云る言ならむ。とをむ。タワム。
十九三十。於吉都奈美等乎牟麻欲比伎於保夫祢能由久良由久良耳於毛可宜尔毛得奈民延都云々とある。等乎牟ハ。タワムと云こと。きこえたり。
○な部
な名バカリ

七卷 六 吾勢子乎 乞許世山登 人者雖云 君毛不來益山
之名尔有之とあるハ、名バカリヂヤソウナと云意なり。
十五 五 伊敝之麻波 奈尔許曾安里家礼 宇奈波良乎
安我古非伎都流 伊毛母安良奈久尔とあるも同ト。

な ナア ウサア

四卷 廿四 大船之念憑師 君之去者 吾者將戀名直相左
右二とある名ハ、歎の意を含めたる助辞にて、俗ナと
云ト同ト ○六卷 十五 白浪之千重來縁流 住吉能岸乃
黄土粉二寶比天由香名とあるハ、イカウサアといふ意
り為奈見奈相奈遣奈沾奈設奈折奈乱奈明奈尋奈死奈

去奈などいふ類の奈みな此ト准べし。

二卷 十四 秋田之穂向乃所縁 異所縁 君尔因奈名事痛
有登母とあるハ、ヨラウサアと云意あり。十四 廿七 多可
伎祢尔久毛能都久能湏和礼左倍尔 伎美尔都吉奈那多
可祢等毛比氏とあるハ、ツカウサアと云意なり。

な ○なれ 御前

四卷 十九 千鳥鳴佐保乃河門乃瀬乎廣弥 打橋渡湏奈
我來跡念者とあるハ、御前ガ御出被成ト思へバと云意
なり。古事記須執理毘賣命 御歌。那遠岐氏 遠婆那志那

遠^ヲ伎^キ氏^テ都^ツ麻^マ波^ハ那^ナ斯^シ云々とあるハ、夫^ハ君^ハ八^千矛^矛神^ヲを指^テ
申^シ給^フへるよて、那^ナ遠^ヲ岐^キ氏^テハ、汝^ナ乎^ヲ除^ク而^テよて、御^オ前^マヲ^ケ
テと云意あり。四^四卷^十一^一丁^二。汝^ナ乎^ヲ與^ト吾^ヲ乎^ヲ人^{ヒト}曾^ソ離^サ奈^ナ流^ル乞^イ吾^ワ
君^ギ人^{ヒト}之^ノ中^チ言^フ聞^ク超^ス名^ナ湯^ユ目^メとあるハ、御^オ前^マト^シ私^シト^シヲと云意
あり。又^又同^同卷^卷丁^丁卅^卅五^五。草^ク枕^ザ客^{キヤク}尔^ニ久^{キウ}成^{セイ}宿^{シュク}者^ヲ汝^ナ乎^ヲ社^{シャ}念^{ネン}莫^{バク}戀^{レン}吾^ワ
妹^モ三^三卷^卷丁^丁十^十八^八。淡^{タン}海^{カイ}乃^ニ海^{カイ}夕^{セキ}浪^{ナミ}千^チ鳥^{トウ}汝^ナ鳴^{メイ}者^ヲ情^{セイ}毛^モ思^シ努^ヌ尔^ニ古^コ
所^オ念^ホるどある汝^ナハ、ソ^ソコ^コモ^モトと云意あり。そもく汝^ナとハ、
後^{ノチ}よハ輕^イしめて云ことよのみなれど、古^コを志^シあらず
そのもとハ、その人を重^{オモ}め尊^{タカ}て称^イすことなるを、後^{ノチ}よ
そうつて、いやくしめてのみ云ことよなれるあり。○十

一^一十三^三。夕^{セキ}去^キ床^{トコ}重^ヘ不^サ去^ラ黃^{ワウ}楊^{ヤウ}枕^{シヤン}何^{ナニ}然^{シカ}汝^ナ主^{シヤ}待^{マシ}固^コ現^{ゲン}報^{ホウ}靈^{レイ}異^イ
記^キ歌^カ。奈^ナ礼^{レイ}乎^ヲ曾^ソ與^ヨ咩^メ尔^ニ保^ホ師^シ登^ト多^タ礼^{レイ}阿^ア牟^ム知^チ能^ネ古^コ牟^ム智^チ能^ネ
餘^ヨ呂^ロ豆^ト能^ネ古^コ云^ク。古^コ今^{キン}集^{シツ}雜^{ザツ}上^{ジョウ}。ちをやふるうぢの橋^{ハシ}守^シ
るれをしぞあをれとハねもふ年の經^ネぬれむとある
奈^ナ礼^{レイ}も、奈^ナと云るよ准^スべし。吾^ワを和^ワ礼^{レイ}彼^カを可^カ礼^{レイ}と云よ
同^{ドウ}例^{レイ}なり。
なかこと。ザンゲン
四^四卷^十一^一丁^二。汝^ナ乎^ヲ與^ト吾^ヲ乎^ヲ人^{ヒト}曾^ソ離^サ奈^ナ流^ル乞^イ吾^ワ君^ギ人^{ヒト}之^ノ中^チ言^フ聞^ク
超^ス名^ナ湯^ユ目^メとあるハ、人^{ヒト}ノザンゲンヲ御^オ聞^ク入^ニ被^レ成^ルナとの
意^イなり。同^{ドウ}卷^卷四^四十^十一^一丁^二。盖^{カシ}毛^モ人^{ヒト}之^ノ中^チ言^フ聞^ク可^カ毛^モ幾^キ許^コ雖^シ待^{マシ}君^ギ之^ノ

不來坐キマサマとあるも同ト。

なかくに ナマナカニ ケツク

四卷四十丁二。中ナカくニ絶タス牟ム云者バ。如此カク許バカリ氣緒イキヲ尔ニ四シ而テ吾將戀アレコヒメ

八方ヤモ十二十二丁二。中ナカくニ人跡ヒト不在アラズ者ハ。乘子クハ尔ニ毛モ成益物乎ナラミモノヲ。

玉之緒許タマノヲなどある。中ナカくニ二ハ。ナマナカニと云意なり。十

一一五五丁二。中ナカくニ不見有從相見戀心益念とあるハ。アハガツ

タマヘヨリハ。逢アヒテノチハケツクコヒシウ思フ心ガマ

サルとの意あり。古今事類

なくヌコトヲヌコトヨ

四卷四丁一。敷細シキス乃手枕ノタマラ不纏マカズ間置アヒオキ而年テトシ曾經ヘニケル來不相念者アハナクモヘバ

とあるハアハヌコトヲと云意なり。十九十九丁五。遙ハルくニ尔ニ

鳴霍公鳥ナクホトギス云々。伎奈加奈久キナカナク曾許波ソコハ不怨ウラミズ云々とあるハ。來

ナカヌコトヲといふ意あり。三卷三丁九。百式紀ヒャクシキ乃大宮オホミヤ

人之飽田津尔ヒトノアキタヅニ。船乘將為年フナノリシケムトシノ之不知久シラナク又又

毛欲得モガ手弱寸女モタヨワキ有者メシアレバ為便スバ乃不知苦シラナク十一十一丁八。情者コロシハ千遍チナヒ

敷及シク雖念シクニオモヘドモ使乎將遣ツラヒヤラム為便スバ之不知久シラナク四卷四丁九。春之雨者ハルノアメハ

弥布落尔イハシキフルニ。梅花未咲久ウメノハナイマサカク伊等イト若美可聞ワカミカモとあるハ。シラヌ

コトヨ。サカヌコトヨと云意なり。

なくもヌコトモ

十二十二丁四。不相毛アハナクモ懈常念者ウシトオモヘバ。弥益イハシ二人言繁ヒトコトシガタキ所聞來可聞シケルカモと

ておゆるくといふべき雅言の格なるを、おいらくといふハ、後よ唱へとがへとるなり。

なくふ ウモノヂヤニ ウコトヂヤニ

三卷四十下。草枕クサマクラ、羈宿カキヤドリ、誰孀タレツミ、可國カクニ、忘有ワシユル、家待イヘマナ、莫國ムクニとある

ハ、家人ノ待ウモノヂヤニと云意なり。十七廿二下。庭ニハル

敷流フシユ、雪波ユキナミ、知敵チテ、之久ノキ、思加シカ、乃未ノミ、於母オモ、比氏ヒシ、伎美キミ、乎安ハア、我麻ワマ

多タ、奈久ナク、尔ニとあるハ、君ヲワシガ待ウモノヂヤニと云意

なり。十卷十五下。今更イマサニ、吾者ウハ、伊不イユ、往ユカ、春雨ハルサメ、之情ノコロ、乎人ハヒト、之不知ノシラザ

有名國ラナクニとあるハ、人ノ知ズニアラウコトヂヤニと云意

なり。十四十五下。乎都ハツ、久波クハ、乃之ノシ、氣吉ゲキ、許能コノ、麻欲マヨク、多都タツ、登利トリ、能

目由メユ、可汝カナ、乎見ハミ、牟左ムサ、祢射ネサ、良奈ラナ、久尔クニとあるハ、相寢トモ、セズニ
アラウコトヂヤニと云意あり。十五廿二下。於毛オモ、波受ハズ、母
麻許マコト、等安トア、里衣リエム、牟也ムヤ、左奴サヌ、流欲ルヨク、能伊ノイ、米尔メニ、毛伊モイ、母我モガ、美延ミエ、射
良奈ラナ、久尔クニとあるハ、見エズニアラウコトヂヤニと云意
なり。そもく、麻多マタ、奈久ナク、尔ニと云ハ、不待ナク、尔射ニサ、良奈ラナ、久尔クニと云
ハ、莫不ナク、尔ニと云意よきこゆる語路なら。志シ、ら、比待ヒマ、麻
久クといふべきを、待奈マタ、久ク、不麻ハラ、久クと云べきを、不奈ハラ、久クと云
るハ、古の一格よて、皆其定よ心得べきこと。右の歌をよ
く味ひて知べし。奈久ナク、ハ、無ナクの意よハ、あらず。後世の語よ
も怪ケしあるといふべきを、けしからぬを、しといふべ

記須勢理毘賣命御歌。牟斯夫須麻尔古夜贺斯多尔云云。とある。尔古夜も全同ト。

なさむ ギヨシンナラウ

古事記上卷沼河日賣歌。毛く那賀尔伊波那佐牟遠云云とあるハ。寐ハ寝給をむをの意よて。俗よギヨシンナラウノニと云ほどの謂まる事なせ。條下よ委いふべし。

なさむ ギヨシンナラズ ギヨシンナラセズ

十一 十八 玉垂之小篔之垂簾乎。往褐寐者不眠友君者。通速為とあるハ。寐ハ寝給をすとももの意よて。俗よギヨシンナラズトモと云が如し。十九 十八 霍公鳥歌。安寝不

令宿君乎奈夜麻勢とあるハ。安寐を寝給ハさすの意よて。ギヨシンナラセズと云が如し。これもなせ。條下よ委云べし。

なさむ 何分ニギヨシンナレ

十四 廿一 於久夜麻能真木乃伊多度乎。等杼登之氏和我比良可武尔伊利伎氏奈左祢とあるハ。入來て寝給をねと云よて。何分ニ入來テギヨシンナレと云意なり。祢を何分ニと云よあされり。

なす ギヨシンナル

十七 廿二 吾乎麻都等奈須良牟妹乎。云くとあるハ。寝給ふらむと云よて。御寝ナルラウと云よ同ト。

なすか ギヨシンナラスナ

十九 十八 二 ホト、ギス 霍公鳥夜喧乎為管我世兒乎安宿勿令寢由

米情在とあるハ安寐を寢給へすかの意よて俗よギヨ

シンナラスナと云の如し。

なす ヤウニ

一卷 十三 一 ハ、ソノカタ 綜麻形乃林始乃狭野榛能衣尔著成目尔都

久和我勢とあるハ衣ニ著ヤウニ目ヲウツリツクと云

意なり。

なせる ギヨシンナツテアル

二卷 四十 二 オキツ、ナミ 奥波來依荒磯乎色妙乃枕等卷而奈世流君

香聞とある奈世流ハ寢給へると云よてギヨシンナツ

テアルと云意なりさてこの歌の奈世流をその長歌よ

自伏君之とありて多 イシキモ 賤奴の死れるを見てよめるも

のトハ思われねバ其反歌よ寢給へると云意よ奈世流

とをいへるなり。

なせ ギヨシンナレ

古事記上卷須勢理毘賣命御歌よ伊遠斯那世とあるハ

寐を寢給へと云よて俗よギヨシンナレと云ほどの謂

なりそむく寢の第三言を奈の第一言よりついである

むる詞とをるハ立の都の第三言を多の第一言よりつ

して立須立世流立世と云と全同格なり。されば尊者の
寝るをあがめて寝須寝世流寝世と云ハ立をあがめて
立須立世流立世と云は同ト寝須ハ寝給ふと云こと寝
世流ハ寝給へると云こと寝世ハ寝給へと云こと立須
を立給ふと云こと立世流ハ立給へる立世ハ立給へと
云ことなる。餘ハ准へて知べし。志あるを立を立須立
世流立世と云類ハあがめていふ意なることハ古學徒
大ら誰もよきまへる趣なるを寝流を奈須奈世流
奈世と云ことハあがめていふ言なるをよくよきまへ
る人なりと見えて今まで注者等もあがめると言ふ

るよしを理れるをきかず。其中本居氏説ハ那佐牟ハ將
寝なり。寝てい言ハ那奴泥と活くをその奴泥ハ常云
ゆゑよく通ゆれども。那ハ後世ハ耳遠きから。那須
那佐牟などいへむ。心得よくきかぬ如くなり。と古事記傳
にも志るせり。この説のごとく。那須那佐牟など云ハ後
世ハ耳遠きことなれど。寝の通へる言なりとまでハ
さとしされど。多々那奴泥と活く言なりとのみ云て。あ
がめていふ意あるを委く理らざりしハ猶深く考へ
至らざりし故なり。右に云る如く。那佐牟ハ寝給をむ。
奈佐受ハ寝給えず。奈須ハ寝給ふ。奈須奈ハ寝給えず。

奈世流ハ寢給へる。那世ハ寢給へと云意なるよて、あは
通をい云るのみのことみハあらざるをさとるべし。

なそへ コトヨセ 相應

十一 久方天光月隱去何名副妹偲とあるハ何ニコ

トヨセテの意なり。○七卷 二 磐壘恐山常知管毛吾

者戀香同等不有尔とあるハ相應ナコトヂヤナイニと

云意なり。伊勢物語よおふなく思ひハをべしなそへな

く。高きいやしきくるしりけりとあるも身分ニ相應

セヌカルイ者かヨイ衆ヲ戀シウ思フハジユツナイモ

ハヤロイと云意なり。其中本亦ハ結上雅對半ハ結

なづさふ 水ニツキソフ

三卷 八丁よ。八雲刺出雲子等黒髪者吉野川奥名豆颯と

あるハ川の沖ニ水ニツキソフテ浮ブヨと云るるべし。

四卷 十六 鳥自物魚津左比去者云々。十二 二 尔保

鳥之奈津柴比來乎云々。古事記雄畧天皇條歌よ。毛々陀

流都紀賀延波云々。斯豆延能延能宇良婆波阿理岐奴能

美弊能古賀佐く賀世流美豆多麻宇岐尔宇伎志阿夫良

淤知那豆佐比云々。などあるみな同ト。按よ。古事記歌よ。

那豆能紀とあるハ浪漬之木といふ義と見えされバ。那

豆佐布ハ浪漬傍るるべし。

なつらす 魚ヲ御釣被成

五卷 丁 廿三 2. 多良志比賣可尾能美許等能奈都良須等美

多志世利斯伊志遠多礼美吉とあるハ魚ヲ御釣被成

トテと云意なり。

なのりそ タツクリ ホンダワラ

三卷 丁 廿四 2. 美沙居石轉尔生名乘藻乃名者告志氏余親

者知友七卷 丁 廿七 2. 梓弓引津邊在莫謂花及採不相有目

八方勿謂花なわこれのれあり今俗よその又のきをタ

ツクリと云その老るるをホンダワラと呼り。

なべちツレテ

一卷 丁 廿二 2. 神長柄所念奈戸二云くとあるハオボシメ

スニツレテと云意なり二卷 丁 廿八 2. 黄葉之落去奈倍尔

玉梓之使乎見者相日所念とあるハチツタニツレテと

云意なり五卷 丁 廿八 2. 于遇比湏能於登企久奈倍尔鳥梅

能波奈和企幣能曾能尔佐伎氏知留美由とあるハ聲ヲ

キクニツレテと云意なりいづれもこれらに准べし。

なほ ヤツパリ マダ

二卷 丁 十五 2. 丈夫哉片戀將為跡嘆友鬼乃益ト雄尚戀二

家里とあるハヤツパリ戀シウ思ウワイと云意なり七

卷 丁 廿二 2. 浪高之奈何梶取水鳥之浮宿也應為猶哉可榜

とあるハ、ウキ子ヲシタモノデアラウカ、ヤツパリコイ
ダモノデアラウカと云意なり。三卷^丁卅二、^二黙然居而賢
良為者、飲酒而醉泣為尔、尚不如來とあるハ、マダオヨバ
ヌコトヂヤワイと云意あり。六卷^丁廿二、^二隼人乃湍門乃
磐母、年魚走、芳野之龍、尔尚不及家里とあるも同ト。

なほ一ソレデモ

十二^丁廿八、^二柜塔越尔、麥咋駒乃、雖詈猶戀久、思不勝烏と
あるハ、ソレデモ戀シウ思フコトヲと云意なり。廿卷^十
二、^二美都煩奈須、可礼流身曾等波之礼、杼母奈保之祢
我比都知等世能伊乃知乎とあるハ、ソレデモ子ガウタ

と云意あり。

なほ一ナミタイテイ、タイガイ、ダマル、ソノマ、
廿卷^四十、^二富等登藝須、奈保毛、奈賀那牟、母等都比等、可
氣都く母等奈安乎、祢之奈久母とあるハ、ナミタイテイ、
或ハタイガイニナケカシ、キツウナクナと云意あり。伊
勢物語、なほ人と云るも、種姓貴カラズナミタイテイ
ノ人といふことなり。○五卷^丁七、^二令反、感情歌、比佐迦多
能、阿麻遲波等保斯、奈保く、尔伊幣、尔可弊利提、奈利乎
斯麻佐尔とあるハ、人倫ヲ離レテ、天上ヘノボラウト思
フホドノ志モ、アルカハシラヌケレド、ソウイフコトモ

カナフマジケレバ、ソノマ、家ニモドツテ、産業ヲ御ツ
トメ被成ヨト云意なり。さて奈保ナホとくとうちあへして
云ろハ、深切ナホと告る謂あり。奈保とのみ云と、奈保とくと
云と異意なるハあらず。四卷四十、如此カク為而哉ヤ。猶ハ
將退、不近道之間乎。煩參來而とあるハ、女ニアフコトヲ
モヨウセズニ、ソノマ、モドラウカと云意なり。又ダマ
ルとも譯すべし。續日本紀十卷、詔ナホ、猶在倍伎物ベキモノ、尔有礼
夜止思行之豆、大御物賜久止宜ナホ。十七、詔ナホ、猶止事不得為
天、恐家礼登毛、御冠獻事乎。云く、伊勢物語イセノモノ、みやづのへ
のむめよ、と、なほやハあるべきなどある。奈保も、ナ

ントモセズソノマ、と云意にて、全同言あり。なまる
なまる○なばるカクレルナホ。十六、忍照難波乃小江、尔廬作難麻里互居、葦河尔乎。
王召跡云く、とあるハ、カクレテ居ルと云ことなり。又那
婆流とも云り。なみ、ナミタイテイ、一通リ。五卷、和加由都流、麻都良能、可波能、可波奈美能、奈
美迹之母波婆、和礼故飛米夜母とあるハ、俗ナホ、ナミタイ
テイといふも、一通リといふも、通ひてきこえたり。
古今集よ、三吉野の大川のべの藤なみれ、なみ小思をい

つらこひめやむとあるも同ト。

なまーひ 一通リノコト

四卷^{卅三} 二。物念跡^ト人尔^ト不見^ト常^ト奈麻^ト强^ト常念^ト弊利^ト有^ト曾^ト金^ト
津流^トとあるハ物思^トヲスルト人目^トニハ見^トセマイト常^ト
オモヘド。一通リノコトデハサヤウニハアリニクイト
云意^トあり。三四の句ハ置倒^トて意得^トべし抑^ト奈麻^トとハ後世^ト
生公^ト達^トなどいふ生^トよて其志^トハあれどもその真^トの地^ト
至らざるを云なるべし。さて强^トて為^トる心^トハあれども猶^ト
得^ト强^ト遂^トざる謂^トよて生^ト强^トとハ云るよて草率^トといふも
似^トたる詞^トなり。からぶみよて愁^ト字^トをナマシヒと訓^トり。愁^ト

且也と注せり。且ハ苟且とつらねて。苟且^ト草率^ト也と注せ
るをも考べし。躬恒^ト家集^トよ。あらとまの年の四とせをな
ま強^ト。身を捨^トかさみ^トびつ、ぞむとあるも。一通リ
ノコトデ身^トカ捨^トニクサニと云意^トなり。

なむ○なめ ナウ ルデアラウ カシナア ヨカシナア 云意

將去^トハイナウと云意。將死^トハシナウと云意なり。○越^ト那^ト
牟^トハコエ^トルデアラウと云意。過^ト那^ト牟^トハスギ^トルデアラウ
と云意。成^ト那^ト牟^トハナルデアラウと云意なり。那^ト米^トと云も。
許^ト曾^トのかゝりの結びの異なるのみよて。譯言^トハ同ト○
一卷^ト十三 三輪^ト山^ト乎^ト。然^ト毛^ト隱^ト賀^ト雲^ト谷^ト裳^ト情^ト有^ト南^ト畝^ト可^ト苦^ト佐^ト

布倍思哉九卷^{丁 廿五} 吾妹兒者久志呂尔有奈武左手乃^{アガオノテニマキテイナシラ}
 吾奥手尔纏而去麻師乎十一^{アガオノテニマキテイナシラ} 四十^{丁 七} 衣霜多在南取易而^{イシモオホクアラナムトリカヘテ}
 著者也君之面忘而有^{キナバヤキミガオモワシラム} 有奈武ハアレカシナアと
 云意なり十卷^{丁 廿一} 默然毛將有時母鳴奈武日晚乃物^{モクシタモアラムトキモナカナムヒグラシノモノ}
 念時尔鳴管本名八卷^{モトナキニナキツモトナ} 一^{丁 卅一} 妹之見而後毛將鳴霍公鳥^{イモガミテノチモナナムホトイギス}
 花橘乎地尔落津などある鳴奈武ハナケカシナアと云意^{ハナタネナラツチニチラシツ}
 なり十四^{丁 廿二} 麻等保久能野尔毛安波奈牟己許呂奈久^{マトホクノヌニモアハナムコハコナク}
 佐刀乃美奈可尔安敞流世奈可母とある安波奈牟ハア^{サトノミノカカアハルセナカモ}
 へカシナアと云意あり古今集よすれ草かれもやせり
 とつれもなき人の心よ霜ハたのなむとあるハオケカ

シナアといふ意なり後撰集よいものうへよとびねをを
 れバいとさむしこけのころもをりれふかさなむとあ
 るむカセカシナアと云意なり右件をいづれも第一位の
 あ韻よりつけとる例なり十二^{丁 十三} 白細之袖不敷^{シロクハノソデカレ}
 而宿烏玉之今夜者早毛明者將開とある將開ハアケヨ
 カシナアといふ意なり古今集よ人志きず思ふ心ハ春霞
 立出て君が目よも見えなむとあるハ見エヨカシナアと
 云意なり同集よ春とてばきゆるこわりの残りなく君
 が心をりれよとけなむとあるハトケヨカシナアと云意
 なり後撰集よ志らくものゆくべき山もさざまらむ思

ふ方ふも風ハよせむとあるハヨセヨカシナアと云意
 なり同集よさをしつまるき戀を高砂の尾上の小
 松き、もいれなむとあるハイレヨカシナアと云意なり
 右件ハいづれも第四位のエ韻よりつゞけさる例なり
 按よ古の歌ハ第一位のあ韻よりつゞけさること多
 く第四位のエ韻よりつゞけさることハきくあり古今
 集よりこなとの歌ハ第四位のエ韻よりつゞけさる
 こと多く第一位のあ韻よりつゞけさることハやい
 くなきあり自然のことなるべし
 なむさちソナタガタ

六卷

丁 廿五

食國遠乃御朝廷尔汝等之如是退去者云々

貞觀儀式十二月大儺祭文詞云云與里乎知能所乎奈
 牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜互云々などある汝等
 ハソナタガタと云意あり

なめく○なめく

ナレクシイ アナドラシイ ブサホフナ

六卷

丁 廿三

倭道者雲隱有雖然余振袖乎無礼登母布奈

とあるハナレクシウスルシワザギヤトオボシメスナ
 との謂なり十二丁九妹登曰者無礼恐云々とあるハア
 ナドラシウオソレ多シとの謂なり繼體天皇紀云々輕安
 閑天皇紀云々輕續紀廿五詔云々無礼之互不從奈賣久在牟

人乎方云く。賣字壹よ。枕冊子よ。郭公をいとなめくうふ
ふ聲ぞ心うきなどあり。中昔物語書よ。多くなめげなる
と云るも。無礼氣といふよて同言あり。或ハブサホフナ
とも聞べし。

なり○なる○なれ ヂヤ

一卷ハよ。奈加弭乃音為奈利とあるハ音をるでありと
云意よて。俗よ音カスルヂヤと云よ同ト。奈利ハ決定辞
とて。目よ見耳よ聞ことをそのまゝしよのよ決ていふ
詞なり。此ハもと尔安利の縮よる詞よて。俗よヂヤと
云よあざれり。言奈利ハイフヂヤ。鳴奈利ハナクヂヤと

云よ同ト。奈留奈礼も。上のかゝるによりて。結詞の異あ
るのみよて。譯言ハ同トことなり。

なりカセギシゴトハ。意ハ。常樂天也云
五卷ト。比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保く。尔伊敞
尔可弊利提奈利乎斯麻佐尔とあるハ。産業を為給へと
云よて。俗よカセギヲ被成ヨ。又ハシゴトヲ被成ヨと云
ふ如し。

なるカセギニスルシゴトニスル

七卷ト。足乳根乃母之其業。乘尚願者衣尔。著常云物
乎とあるハ。母ガカセギニスル。又ハシゴトニスルと云

意あり。廿卷丁。佐伎牟理尔ニ多ム牟佐和伎尔ニ伊敞能ハ伊毛我奈流敞伎己等乎伊波須伎奴可母とあるも同ナなる。ニアル。デアル。

三卷丁。吉野尔有夏實之河乃河余杼尔。鴨曾鳴成山影尔之氏とあるハ。吉野ニ在ルといふなり。春日爾在御笠山おど云類なり。尔阿切奈なれむなり。○三卷丁。常磐成石室者今毛安里家礼騰住家類人曾常無里家留とあるハ。常磐であるといふ意にて。俗ニ常磐デアルと云ふ同ト。

なる。ヤブレル。ヨゴレル。アカツク。ケガレル。異ニ

九卷丁。石上振里尔。紐不解。丸寐乎為者吾衣有服者。奈礼奴每見戀者。雖益云とあるハ。ヤブレタ。或ハヨゴレタ。或ハアカツイタ。或ハケガレタと云意なり。此ハ久ク旅中ニありて。解洗セ或ハ縫ツバニなるトする人のなき故ニ。着ルる衣の。破レ穢レ垢ヅきスるをいふなり。衣ノ奈留クハ。破レ穢レ垢ヅくトよリりて云コとなり。

○に部
にき
成尔伎ハナツタ。絶尔伎ハタエタと云意あり。

にきはだ ニツトリトシタハダ

二卷 一 靡相之孀乃命乃多田名附柔膚尚乎劔刀於

身副不寐者云とあるハニツトリトシタハダと云意

なり。

にきび ニツトリ

一卷 二 天皇乃御命畏美柔備尔之家乎擇云とあ

るハ住馴テ居心チヨウニツトリトシタ家ラステオイ

テと謂なり三卷 五 丹杵火尔之家從裳出而云と

あるも同トハコ子サウ

にこぐさ ハコ子サウ

十一 九 蘆垣之中之似兒草尔故余漢我共咲為而人
尔所知名十四 二 安思我里乃波故祢能祢吕乃尔古具
佐能波奈都麻奈礼也此母登可受祢牟などな不あり似
兒草ハ俗ハコ子サウといふものなりといへり

所見尔志ハミエタ歸尔志ハカヘツタと云意あり

にふいよるみ ニコクトワラウテ

十六 五 可流羽須波田廬乃毛等尔吾兄子者二布夫

尔咲而立麻為所見十八 一 花咲尔布夫尔惠美天

云くなどあるハ俗ハニコクトワラウテと云ふ同ト

にほどり カイツブリ
 四卷^{五十} 二寶鳥乃潜池水情有者君尔吾戀情示左祢
 十一^{十二} 念餘者丹穗鳥足沾來人見鴨カモな不多し今俗
 二カイツブリといふ鳥なり

ぬ部

ぬ
 タ 子ル

一卷^十 熨田津尔船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今
 者許藝豆菜とあるハ潮が満來テ出帆スルニ叶ウタと
 云意あり沼ハ已成の奴まで已く時は至りぬるを云同
 卷^{十一} 冬木成春去來者不喧有之鳥來鳴奴云くとあ

るも鳥モ來テナイタと云意よて同ト○尋奴と云ハ俗
 二タン子ル東奴と云ハ俗よツカ子ルといふことなり

ぬなは ジュンサイ

七卷^{十四} 吾情湯谷絶谷浮蓴邊毛奥毛依勝益士古事
 記應神天皇御歌二美豆多麻流余佐美能伊氣能云く奴
 那波久理波開祁久斯良迹云く日本紀今俗ハ蓴菜
 の字音を以テジュンサイと称り

ぬら ナビカシ

十一^{十六} 凡者誰將見鴨黑玉乃我玄髮乎靡而將居又
 十九^夜 干玉之妹之黑髮今夜毛加吾無床尔靡而宿良武

まゝ丁廿三夜干玉之吾黒髪乎引奴良思乱而反戀度鴨な
どある奴良思ハナビカシと云ことなり。

ぬもせに 野一ッパイニ

せ部よ出ッ。

ぬもり ノバン

一巻丁十三。葛草指武良前野遊標野行野守者不見哉君
之袖布流とある野守ハ野バンのことあり。

ぬろ ○ぬれ タ子ル

咲奴流散奴流知奴流など云ハサイタチツタシツタと
云意なり。奴礼も許曾のかよりによりて結詞の異なる

のみよて譯言ハ同トことなり。○尋奴流と云ハ俗よタ
ン子ル重奴流と云ハ俗よカサ子ルといふことなり。

○ね部

ね 何分ニ

一巻丁七。家告閑名告沙根云く。五巻丁七。奈何名能良佐
祢九巻丁十五。汝名告左祢などあるハ何分ニ名ヲナノラ
ツシヤレと云意あり。五巻丁廿五。余呂豆余尔伊麻志多麻
比提阿米能志多麻乎志多麻波祢美加度佐良受豆とあ
るハ何分ニ天下ノ政事ヲ御執リ被成ヨと云意あり。同巻
丁廿六。阿我農斯能美多麻多麻比豆波流佐良婆奈良能

美夜故尔^{ミヤコニ}咩佐^{ササ}宜多^{イタ}麻波^{マハ}祢^ネとあるハ何分ニ召上^{シメ}ラレヨ
と云意なり。十一^{十一} 君不來者^{君不來者}形見^{カタミ}為^ニ等^ト我^{アガ}二人^{フタリ}植松^{ウヅマツ}
木^キ君^{キミ}乎^ヲ待^{マテ}出^デ年^チとあるハ何分ニ君^君ヲ待^待ツケヨと云意
り。二卷^{二卷} 鳥^ト峙^{タテ}立^{タテ}飼^{カヒ}之^シ雁^{カリ}乃^ノ兒^コ栖^ス立^{タテ}者^者檀^マ崗^ミ尔^ニ飛^ヒ反^{カヘ}來^リ
年^チとあるハ何分ニ飛^飛反^反來^來レと云意なり。十四^{十四} 阿^ア
良^ラ多^タ麻^マ能^ネ伎^キ倍^ヘ乃^ノ波^ハ也^ヤ之^シ尔^ニ奈^ナ乎^ヲ多^タ氏^シ天^テ由^ユ吉^キ可^カ都^ツ麻^マ思^シ目^モ
移^イ乎^モ佐^サ伎^キ太^タ多^タ尼^ニ十八^{十八} 二^二等^ト能^ネ具^グ毛^モ利^リ安^ア比^ヒ豆^テ安^ア米^メ母^モ
多^タ麻^マ波^ハ祢^ネ十九^{十九} 二^二月^{ツキ}尔^ニ日^ヒ尔^ニ之^シ可^カ志^シ安^ア蘇^ソ婆^バ祢^ネ波^ハ之^シ伎^キ
和^ワ我^ガ勢^セ故^コ廿^ニ卷^ニ 二^二知^チ波^ハ江^エ己^イ波^ハ比^ヒ豆^テ麻^マ多^タ祢^ネ豆^テ久^ク志^シ
奈^ナ流^ル美^ミ豆^ヅ久^ク白^{シラ}玉^{タマ}等^ト里^リ豆^テ久^ク麻^マ豆^テ尔^ニ又^ニ 二^二阿^ア我^ガ母^モ豆^テ能^ネ和^ワ

須^ス例^レ母^モ之^シ太^タ波^ハ都^ツ久^ク波^ハ尼^ニ乎^ヲ布^フ利^リ佐^サ氣^ケ美^ミ都^ツ伊^イ母^モ波^ハ之^シ奴^ヌ
波^ハ尼^ニ又^ニ 二^二和^ワ我^ガ由^ユ伎^キ乃^ノ伊^イ伎^キ都^ツ久^ク之^シ可^カ婆^バ安^ア之^シ我^ガ良^ラ乃^ノ美^ミ
祢^ネ波^ハ保^ホ久^ク毛^モ乎^ヲ美^ミ等^ト登^ト志^シ怒^ヌ波^ハ祢^ネなどあるも皆右^右ニ准^准へ
てさとりべし古事記神武天皇大御歌^{古事記神武天皇大御歌}多^多知^知曾^曾婆^婆能^能微^微
能^能那^那祢^那久^久袁^袁許^許紀^紀志^志斐^斐惠^惠泥^泥云^云伊^伊知^知佐^佐加^加紀^紀微^微能^能意^意富^富祢^祢
久^久袁^袁許^許紀^紀陀^陀斐^斐惠^惠泥^泥日本紀崇神天皇大御歌^{日本紀崇神天皇大御歌}宇^宇磨^磨佐^佐階^階
弥^ミ和^和能^能等^等能^能阿^阿佐^佐妬^妬珥^珥毛^毛於^於辞^辞寐^寐羅^羅箇^箇祢^祢弥^ミ和^和能^能等^等能^能渡^渡
烏^ウ安^安康^康天^天皇^皇卷^卷歌^歌於^於朋^朋麻^麻弊^弊烏^ウ摩^摩弊^弊輸^輸區^區壘^壘餓^餓訶^訶那^那杜^杜加^加
處^處訶^訶區^區多^多智^智豫^豫羅^羅泥^泥阿^阿梅^梅多^多知^知夜^夜梅^梅牟^牟などな不^不多^多くあり
これらの祢^祢みれ同意なり。

ねか○ねかも 子バニヤ 子バカシテ

不行可ハ行子バニヤ或ハ行子バカシテと云意あり不

知可ハシラ子バニヤ或ハシラ子バカシテと云意なり

いづれもこれに准知べし○不行可母不知可母など母

の辞れそハアとるも同意にて母ハマアといふ歎息辞

るれば可とのみ云とるよりハ委しきかなり二卷九

丁又橘之島宮尔者不飽鴨佐田乃岡邊尔待宿為尔往と

あるハ飽タラ子バカシテ佐田ノ岡ヘニシユクバンヲ

シテイクカシラヌイカサマアアハレナコトヤと歎

息とる意をその母の辞に含ませとるなりいづれも准

ねぎ 大義ナガラト云

六卷丁廿五又食國遠乃御朝庭尔汝等之如是退去者平久

吾者將遊手抱而我者御在 天皇朕宇頭乃御手以搔撫曾

祢宜賜打撫曾祢宜賜將還來日相飲酒曾此豐御酒者と

ある祢宜賜ハ大義ナガラト仰出サレルと云ことなり

廿卷丁十八又登利我奈久安豆麻乎能故波伊田牟可比加

弊里見世受豆伊佐美多流多家吉軍卒等祢疑多麻比麻

氣乃麻尔まく云くとあるもエライ軍卒ギヤホドニ大

義ナガラ筑紫ノシヅメニイテ來レヨト仰出サレテと

云意なり。身の勞苦を称慰めていふ辞あり。

ねバ 又ニ

二卷 丁 卅三 一。挂文云。憶毛未盡者とあるハ。マダツキ又

ニと云意なり。四卷 丁 卅九 一。奉見而未時太尔不更者。如年

月所念君とあるハ。マダソノジセツモカハラ又ニと云

意あり。をべて盡ぬ。有ぬ。と云意の處を。不盡者。不有

者。と云るやうのこと。古風の歌。いと多し。八卷 丁 卅八 一。

秋立而幾日毛不有者。此宿流朝開之風者。手本寒母。十卷

丁 卅七 一。一年迹。七夕耳。相人之戀毛。不遇者。夜深往久毛。又

丁 卅八 一。天河足沾渡君之手毛。未枕者。夜之深去良久。十二

丁 卅八 一。

他國尔。結婚尔。行而太刀之緒毛。未解者。左夜曾明家流。古

事記上卷。八千矛神御歌。多智賀遠母。伊麻陀登加受豆。

淤須比遠母。伊麻陀登加泥婆云。日本紀。天智天皇。卷童

謠。於弥能古能野。陞能比母。騰俱比。騰陞多尔。伊麻拖藤

柯祢婆。美古能比母。騰矩。これらみな同格あり。

ねぶ カフカギ

八卷 丁 卅一 一。晝者。咲夜者。戀宿合歡木花。吾耳將見哉。和氣

佐倍尔。見代。又 丁 卅二 一。吾妹子之形。見乃合歡木者。花耳尔。咲

而盖實尔。不成鴨。十一 丁 卅八 一。吾妹兒乎。聞都賀野邊。靡合

歡木。吾者。隱不得。間無念者。などあるハ。今俗。カフカギ

と呼木なり。合歡木の字音の轉なり。

ねむ 子ヨウ

將重カチムと云ハ、カサ子ヨウ。將東ツカチムと云ハ、ツカ子ヨウと俗ヤ

云ヤ同ト

ねもころ シンセツ カヘスグ

四卷丁 卅五 押照難波乃管之根毛許呂尔君之聞キコシテ四手云

云とあるハ、シンセツニと云意なり。此例多ト。二卷丁 卅七

天飛也輕路者吾妹兒之里尔思有者バニシコロミツクホシケド勲欲見騰云と

あるハ、カヘスグと云意あり。十四丁 十三 伊香保呂能

蕪比乃波里波良祢毛己呂尔於久乎奈加祢曾麻左可思

余ヨ加婆カバとある。これもカヘスグといふ意ヤて同ト。抑

根ネとハ、物の底の極をいふ称ナよて、水草の根ネども、土底

の極延入ヒよシ此称ナなり。毛許呂モコロハ、如と云ことよて、古例

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

多シ。か、れば行至らぬ極キマなく、慇コシ又シ勤シく為ナ思オモふこと

のを ヤウニ

那須ナスといふヤ同トナ部照見ベ。

のど ニブイ トロイ

十三 卅三 吹風裳母穗丹者不吹立浪裳篋跡丹者不起

云くとあるハ、篋跡ハ和よて、荒の反對あり、されハ荒く

をげしく興意よて、俗ニブウニハタ、ズと云意あり。

二卷 卅三 明日香川四我良美渡之塞益者進留水母能

杼尔賀有萬思とあるハ、急イ流レモトロウナツテ、ヨド

ウデアラウモノヂヤニと云意あり、拾遺集ハ、涙川のど

ろよだよも流れなむ、戀いき人の影や見ゆると、ある

のどろも同く、春のころハのどけらまゝ、又をべて

日影の長閑なると云ハ、俗よユウクトシタと云意よて、

是ももといハ、この能杼より出さる言なり。

のみ ハ バツカリ

一人耳と云ハ、一人バツカリ、君尔耳、妹尔耳など云ハ、君

ニバツカリ、妹ニバツカリと云意なり。

○は部

ばかり ホド

幾許と云ハ、イカホドと云意、玉緒許と云ハ、玉緒ホドと

云意あり。

はく カケル サス ツケル スゲル

二卷 十一 三薦刈信濃乃真弓不引為而絃作留行事乎

知言莫君尔又^ハ。梓弓都良絃取波氣引人者後心乎知^ル。
人曾引^{十四}。美知乃久能安太多良末由美波自伎^キ。
於伎氏西良思馬伎那婆都良波可馬可毛とあるハ。弦
ヲカケルといふことなり。廿卷^{四十}。麻須良乎等於毛
敝流母能乎多知波吉氏可尔波乃多為尔世理曾都美家
流とあるハ。刀ヲサイテと云意なり。十四^{十一}。信濃道
者伊麻能波里美知可里婆祢尔安思布麻之牟奈久都波
氣和我世とあるハ。沓を著よといふて。これハ今世
も波久といへり。十六^{廿一}。馬尔已曾布毛太志可久物
牛尔已曾鼻繩波久礼云くとあるハ。鼻繩ヲツケル。或ハ

スゲルといふことあり。
はく フコトガ吉フコトヲ フコトハフヤウハフコトヨ
十九^{十二}。矢形尾乃麻之路能鷹乎屋戸尔須惠可伎奈
泥見都追飼久之余之毛とあるハ。カフコトガといふ意
なり。同卷^{廿二}。吾幾許斯奴波久不知尔霍公鳥伊頭敝
能山乎鳴可將超とあるハ。シタフコトヲと云意なり。六
卷^{廿九}。後尔之人乎思久四泥能埒木綿取之泥而將往
跡其念とあるハ。シタフコトハ。或ハシタフヤウハと云
意あり。九卷^{十八}。恠常所許尔念久從家出而三歳之間
尔。墻毛無家滅目八跡云くとあるも。オモフコトハ。或ハ

オモフヤウハと云意よて同ト。伊勢物語よ、さるよら此、
大將出て、人よとむりたまふやう、みやづゝへのをト
めよ、いほなほやハあるべき云くとあるも、古言ならバ、
賜波久と云べきを、たまふやうと云るなり、これおて、波
久ハ、フヤウハと云意なるを思べし、からぶみよて、曲禮
曰、内則曰、などある曰を、イハクとよむも、イフヤウハと
いふ意なり、イハクハ、イフの伸アさることよて、イフと
いふよりハ、なほ委しき方なり、二卷_{十二}、三吉野乃玉
松之枝者、波思吉香聞君之御言乎、持而加欲波久とある
カヨフコトヨと云意なり、十九_{十六}、毎年尔來喧毛

能由惠霍公鳥聞婆之努波久不相日乎於保美とあるも、
シタフコトヨと云意よて同ト、
はくフヤウハルヤウハ
廿卷_{廿六}、多久頭怒能之良比氣乃宇倍由奈美太多利、
奈氣伎乃多婆久可故自母乃多太比等里之氏云くとあ
るハ、ノタマフヤウハ或ハオツシヤルヤウハといふ意
なり、
はくも フコトモ
四卷_{廿四}、_丁 幼婦常言雲知久手小童之哭耳泣管云くと
あるハ、イフコトモと云意あり、ねよそ、かく、けく、さく、

なくはくまくらくなどの類みな同格よ用く辞よて譯
言も大らと同トさまふりな不各其條くを照考て准知
べし。

はぐむ カイホウ

九卷 一 客人之宿將為野尔霜降者吾子羽裏天乃鶴
羣とあるハ羽の裏よつみて霜のからぬやりに愛
せよと鶴よ令せとる意よて落るところハ俗よ介抱せ
ヨといふ意なり十五 四 武庫能浦乃伊里江能渚鳥羽
具久毛流伎美乎波奈礼氏古非尔之奴倍之又 同大船尔
伊母能流母能尔安良麻勢波羽具久美母知氏由可麻之

母能乎などよめるも同ト皆鳥の羽の裏よ裏むよとと
へていへるあり後又ひろく愛育するをはごくむとい
ふも此より轉て來れる言あり

はしき カハイラシイ

二卷 十四 三吉野乃玉松之枝者波思吉香聞君之御言
乎持而加欲波久とあるハカハイラシイ哉と云意なり
三卷 五 十 波之吉可聞皇子之命乃云く廿卷 十九 二 奈
我伎氣遠麻知可母戀牟波之伎都麻良波などあるも同
ト二卷 三 早布屋師吾王乃四卷 八 波之家也思
不遠里乎廿卷 五 十 波之伎余之家布能安路自波など

ありて、其同ト詞を處こよ。愛八師ハシキヤシとも書さる愛字、義よて、意得べし。

はトハゼ

廿卷五十一波之由美乎。多尔藝利母多之。云く古事記よ。天之波士弓。日本紀よ。天。梶弓など見えり。この波自を。今俗よ。ハゼといへり。

はトヤムコトナウ

一卷廿八見吉野乃山下風之寒久尔。為當也。今夜毛我獨宿ヒトリキム年とある。この波多ハ。そのもと心よ欲コホをす。厭イハひ惡ニラみてあることなれど。外よすべきをぢなくて。止ことな

くする意なり。為當の字よハ泥むべららず。此字の事ハ後よいふべし。されば此ハ山下風ヤマノアラシノキツウ寒ウテ。獨宿セラレル夜ナラ子ド外ニスベキスチナケレバヤムコトナウ。獨宿ヲセウカと云意なり。四卷五十一神左夫跡。不欲者不有。八多也。八多。如是為而後二。佐夫之家牟可毛。八多也。八多をハとあるハ。ワシガ年ニヨツタトテ。御前オマヘ也。多ハ誤れり。とあるハ。ワシガ年ニヨツタトテ。御前ノ心ニサカウテ。アフコトハスマイト云テハナイ。サレバ止コトナウシテ。御アヒ申スベキナレド。アウテアトデ。御前ノ心ガカハツテ。ワシガ年ニヨツタユエ。キラハシイトテ。イトハレタトキ。シンキナコトデアラウカ。との謂ふ

り。六卷^丁廿一。竿^サ牡鹿^{シカ}之^ノ鳴^{ナク}奈流^{ナリ}山^{ヤマ}乎^ヲ越^{コエ}將去^{ユカム}日谷^{ヒタ}八君^{ヤキミ}當^{ハタ}
不相^{アハ}將有^{ザラ}とあるハ。フダンノコトハドウデモアレ。牡鹿
ノ鳴^{ナク}山^{ヤマ}ヲ越^{コエ}テ。ワカレヤウ日ニナリトモ。アウタラバヨ
イニ。サヤウノコトモデキ子バ。止^トコトナウシテ。サビシ
イ山^{ヤマ}ヲ。タツタヒトリコエテイカウカ。との謂^{イハ}なり。十一
十九。人事^{ヒトコト}之^ノ繁^{シガキ}間^マ守^{モリ}而^{シテ}相^ア十^{ヒト}方^モ。八^ハ反^タ吾^{アガ}上^{ウヘ}尔^ニ事^{コト}之^ノ將^{シガ}繁^ム。反^ハ
多^タの^ノとあるハ。タトヒ世間ノ人目ノ隙ヲウカバウテア
誤^ア。ウタトテ。十分ニ人目ノシノバレルモノデモナケレバ。
トカク世間ヘモレキコエテ。名ヲタテラレルデアラウ
カ。サラバトテ戀^{コイ}シウ思^{オモ}フ心^{ココロ}ガ。ドウモシヅメガ夕^{ユフ}ウテ。

止^トコトナウシテアウタナラ。イヨク世間ノトリザタ
ガ。シゲウナラウゾイ。との謂^{イハ}なるべし。十五^{十五}。伊能^{イノ}
知^チ安^ア良^ラ婆^バ。安^ア布^フ許^{コト}登^ト母^モ安^ア良^ラ牟^ム。和^ワ我^ガ由^ユ惠^エ尔^ニ。波^ハ太^タ奈^ナ於^オ毛^モ比^ヒ
曾^ソ伊^イ能^ノ知^チ多^タ尔^ニ。敝^ヘ波^バとあるハ。ワシガ身ノ故ニヨツテ。止^ト
コトナウ物思^{モノオモ}ヲスルデアラウガ。命^{イデ}サヘナガラヘテ。息^イ
災^イテ居^イルナラ。又アフコトモアラフホドニ。サウ物思^{モノオモ}ヲ
為^シルコトナカレ。との意^イならむ。十六^{十六}。瘦^{ヤス}母^モ生^イ有^ラ
者^バ將^ア在^{ラム}乎^ヲ。波^ハ多^タ也^ヤ。波^ハ多^タ武^ム奈^ナ伎^ギ乎^ヲ。漁^ト取^ル跡^ト。河^カ尔^ニ流^ル勿^ナとある
ハ。鱸^ハハ夏^{ナツ}瘦^{ヤス}ノ藥^{ヤク}ノ第一^{ダイ}ト承^{ウケ}レバ。シタチ殺^{コロ}生^{スル}コト
ハスキコノマズトモ。殺^{コロ}生^{スル}ナラデハ。外^{ソト}ニトリ獲^エルシミ

チナケレバ止コトナウ殺生ヲシテ鱸ヲ漁テ御用被成
ヨシカシナガラ鱸ヲ漁トテ誤テ河ニ御流被成ナ瘦ナ
ガラモ存テアラウガマシヅとの謂ときこえたり十八
九多胡乃佐伎許能久礼之氣尔保登等藝須伎奈伎等
余末婆波太古非米夜母とあるハ霍公鳥ヲ慕フ心ガコ
タヘガタウ止コトナウシテ戀シイクト思フノチヤ
ニドウゾコダマノヒバクホド來テ鳴カシサウアラウ
ナラカウイフ物思ハスマイニとの意なるべし古今集
夏部ほとぎに初聲きけバあぢきなく主さごまら
ぬ戀せらる波多とあるも戀ゴチニスルコトハソノ

モト心ニ欲ハヌコトナレド霍公鳥ノ初聲ヲキケバ何
トカヤ感情ガオコツテ止コトナウ主定ラヌ戀ゴチ
ガ遠慮モナウニセラレルヨとの謂らむさて又日本
紀欽明天皇卷ニ於是許勢臣問王子惠曰為當欲留此間
為當欲向本郷とあるハ同言異意にてこの為當ハマタ
と云意はちのしまさハ此間ニ留らむと欲ふのまさは
本郷ニ向らむと欲ふと云意なり此他古書も波多と
云ニ為當と書ること多し為當の字ハ左傳疏ニ見え
り又抑將等の字を波多と訓ることも日本紀ををいめ
往々見えたりこれらもマタと云意は近しさて波多と

云ふ古より兩義あるが中よ上にいへるごとく古の歌
詞よ云るハ為當の字を用ひとるとハ別義なれど字ハ
いづれも波多と訓るゝ故よ為當の意ならねども此
字を借用ひしものと知べし。

はだれ ちらく バラく 雪

八卷 十四 沫雪香薄太礼尔零登見左右二流倍散波何
物之花其毛とあるハ沫雪ノちらくフルカト見ルホド
ニとの意なり十卷 卅八 天雲之外雁鳴從聞之薄垂霜
零寒此夜者とあるハ霜ノバラくトスリといふことあ
り九卷 十二 御食向南淵山之巖者落波太列可削遺有

削ハ消字の誤なりとあるハやめて雪を波太列といへるかり

はつ ちらく

四卷 四十 波都くく尔人乎相見而何將有何日二箇又
外二將見とあるハ思フ人ニちらくトアウテと云意か
り七卷 卅二 是山黄葉下花矣我小端見反戀十一 山
葉追出月端く妹見鶴及戀十四 卅二 久敝胡之尔武藝波
武古馬能波都くく尔安比見之兒良之安夜尔可奈思母
などあるみな同ト。

はな アダ アダくシウ

八卷 十七 霞立春日里之梅花波奈尔將問常吾念奈久

爾廿卷四十_二麻比之都_レ伎美我於保世流奈豆之故我
波奈乃未等波無伎美奈良奈久尔などあるハ。アダニ。又
ハアダアダシウと云意あり。

はなものの アダナモノ

十二_二白香付木綿者花物事社者何時之真坂毛常

不所忘十三_一高山與海社者山隨如此毛現海隨然

直有目人者花物曾空蟬與人などある。花物ハアダナモ

ノと云意なり。

はにふ 子エツチバ

一卷_二草枕客去君跡知麻世婆岸之埴布尔仁寶播

散麻思乎とある。埴布ハ子エツチバのことなり。

は、そ、ホウソノキ

九卷_二山品之石田乃小野之母蘇原見乍哉公之山

道越良武十九_二波播蘇葉乃母能美許等云くなど

見えり。國よりて、俗ハウソノキといへり。

はふり シヤニン

七卷_二三幣帛取神之祝我鎮齋杉原燎木伐殆之國

手斧所取奴十九_二住吉尔伊都久祝之神言等行得

毛來等毛船波早家無などある祝ハみれ世といふ社人

なり。

はまゆふ ハマオモト ハマバセウ

四卷丁十四 三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不

相鴨ヌカモとある濱木綿ハ今俗ハハマオモトとも濱芭蕉と

もいへり。

はまむせに 濱一ッパイニ

せ部又出。

はむ クフ ノム

一卷丁十五 空蟬之命乎惜美浪尔所温伊良虞能島之玉

藻苧食とあるハタマモカリハムと訓べしハムハ今ク

フといふ又あされり後世ハ波武てふ言ハ鳥獸のう

へよのみいぶごとくなれど古ハ何よもいへり五卷

ハ二宇利波米波胡藤母意母保由久利波米婆麻斯提斯

農波由又七卷丁廿二 芽花乎雖喫十卷丁九 鳥者雖不喫

十二丁廿八 麥咋駒乃十四丁廿九 久佐波牟古麻能又十

六丁十八 屎鮒喫有又丁廿四 作有流小田乎喫鳥又丁同 飯喫

騰又丁廿七 榎實毛利喫古事記上卷乃生蒲子是撫食之

間云乃生筭是拔食之間云トシハニ 毎年来喫などある

是らも皆志の訓べき所ありをべて後世久布といふこ

とを古ハもをら波牟と云りつらく古言此やうを思ふ

久布と波牟とをいさゝの差別あること見えたり

一ことを忘れども見えざる波夜久ハ俗よトホカラ
あるハマヘカタ或ハセンダツテといふ意などよきこ
えり日本紀允恭天皇御歌よ波那具波辞佐區羅能梅
涅許等梅涅麼波椰區波梅涅孺和我梅豆留古羅とある
もコノヤウニシヤウクワンスルクラ井ナラトホカラ
シヤウクワンセウモノデアツタニと云意なりこれら
の波夜久ハみち既往の字意よて過去とる方のことよ
のみいへり速久行己曾あるハ倭邊早久などやうにい
ふ早ハ現在のことにいふことよて今俗よ云も異なるら
ねバとつふことなし後世さきにありしことをいふ波

夜久を既といふをさかへり古書よ須泥尔といへるハ
俗よ一メンニといふ意なり字書ハ既盡也と注しとる
其意なり漢籍よても既已也と注しとる其意のときハ
スデニとハ訓べおらずハヤクと訓べし猶す部をでし
條合考べし
はらゝにろきてバラクウカウデ
廿卷廿五丁五安麻乎夫祢波良ハニ尔字伎互云くとあるハ
ちりぐに浮びさる形を云るよて俗よバラクウカウデ
と云よ同ト
はりハシノキ

一、卷^丁廿五、引馬野^{マノ}仁保^{ニホ}布^フ榛原^{ハシハラ}入^{イリ}乱^{ミダリ}衣^イ尔^ニ保^ホ波^ハ勢^セ多^タ鼻^ビ
能^ノ知^{シル}師^シ尔^ニ三^ニ卷^ニ、去^イ來^ザ兒^コ等^{ドモ}倭^{ヤマト}部^ヘ早^{ハヤク}白^{シラ}菅^{スガ}乃^ノ真^マ野^ノ乃^ノ榛^{ハシ}原^{ハラ}
手^テ折^{オリ}而^テ將^{ユカム}歸^ル、まどなふ多^シ、針^{ハリ}とも波^ハ里^リとも書^シり、これ
を俗^{ソコ}よハ^ニン^ノキといふものなり、今も土左^{ツサ}國^{クニ}などよて、
ハリノ木^キと呼^ヒび、波^ハ藝^ギよハあらず、まどふべあらむ。

はる ヒラキツクル

十、卷^丁五十、住^{スミ}吉^ノ之^ノ岸^キ乎^ヲ田^タ尔^ニ壘^{ハリ}蔭^イ蔭^イ秀^{ヒテ}而^テ及^{カル}苅^{アハ}不^マ相^キ公^{カミ}鴨^{カモ}
とあるハ、田^タニヒラキツクリといふなり、十四^丁十一、信^シ
濃^ヌ道^チ者^ハ伊^イ麻^マ能^ノ波^ハ里^リ美^ミ知^チとあるも、治^{ハリ}道^{ミチ}よてヒラキツク
ツタ新^ニ道^チといふなり、古^コ書^{ショ}に、

○ひ、部

ひきかゞふりヒツカブリ
五、卷^丁廿九、麻^{アサ}被^フ引^{ヒキ}可^カ賀^カ布^フ利^リ云^クとあるハ、俗^{ソコ}よヒツカ
ブリと云意^イなり。

ひきのまにく
六、卷^三四十、恃^{クシ}有^リ之^シ名^ナ良^ラ乃^ノ京^{キョウ}矣^ヤ、新^ニ世^セ乃^ノ事^{コト}尔^ニ之^シ有^レ者^バ皇^{オウ}之^シ
引^{ヒキ}乃^ノ真^マ尔^ニ真^マ荷^カ春^{ハル}花^{ハナ}乃^ノ遷^{ウツロ}日^ヒ易^イ云^クとあるハ、大^{オホ}皇^{ミコ}ノメシ
ツレテイカセラル、マ、ニといふことなり、引^{ヒキ}ハ京^{キョウ}を
引^{ヒキ}遷^{ウツロ}一^{ヒト}賜^{タマフ}ふを云^クよハ非^ヒず、十九^丁廿九、宇^ウ都^ツ世^セ美^ミ乃^ノ與^ヨ能^ノ
許^{コト}登^ト和^ワ利^リ等^ト麻^マ須^ス良^ラ乎^ヲ能^ノ比^ヒ伎^キ能^ノ麻^マ尔^ニく^ク之^シ奈^ナ謝^ガ可^カ流^ル古^コ

之地乎左之氏波布都多能和我礼尔之欲利云云これハ
京師なる大伴坂上郎女の女子大嬢家持卿妻の夫ニ從
ひて越中ニ下りてあるが許へ贈れるなりさて大嬢の
越中へ下られけるハ家持卿の下られけるよりや後
のことなれどあづかよそに引つれて下られたま
よと云るなり古事記八千矛神御歌よ比氣登理能和賀
比氣伊那婆とあるも比氣ハ所引よて引つれられてい
なむの意なり源氏松風よさるがしきよひのれて出
まふとあるも人々のさるき立引率行に引つまられて
行と云意あり

ひさめ大アメ
二卷四十泣涙霈霖尔落者白妙之衣塗漬而云くと見
ゆ抑比左米と云よ氷雨と大雨との二ッあり其つよハ此
歌よいへるも大雨よて比左ハ比多よ通ひて
多比多雨なり即日本紀垂仁天皇卷よ大雨をヒサメと
もヒタメともよめりさて比多ハヒタルヒタスヒタス
ラヒタモノヒタムキヒタラヒタツチ其餘比多某とい
ふ比多よてをやみふくひとせらよふる雨の意よて大
アメなり武烈天皇紀よ甚雨とあるも同トこの霈霖ハ
即それなり霈大雨也と注せるを思べしつよハ古事記

中卷景行天皇條フタオホヒ。零ヒ大氷雨ヒ。下卷允恭天皇條ヒも見ゆ。
日本紀神武天皇卷ヒ。雨氷ヒ。孝德天皇卷ヒ。滂雨ヒなどある。
これにて天武天皇卷ヒ。氷零大如桃子ヒとあり。即今世ヒ
へウと云ものあり。源氏赤石ヒも。地の底徹ヒるむりの
氷降ヒとも見えとり。志のるを和名抄ヒ。文字集畧云。霈大
雨也。日本紀私記云。火雨。和名比左米。冰雨同上。今按。俗云
比布留ヒとあるハ。大雨と氷雨と混ヒ。たもひ誤ヒするもの
なり。又按。火雨とあるハ。もとて大雨なりけむを。ヒ。サ。
メ。といふを意得誤ヒてより。大ハ火字なるべくたもひて。
心。さ。の。し。ら。に。改。め。つ。る。な。る。べ。し。推古天皇。天智天皇。紀ふ

ど。火雨とあるも同ト。こそともハ。彼私記のころより
を後ヒ誤ヒつるものなるべし。さて古事記傳ヒ。比左米
とハ。もと氷の降るを云て。其より轉りて。尋常の雨ハ。甚
く零るをも云ヒと見えて。飛鳥宮段なる氷雨ハ。歌ヒと
阿米ヒとよめりと云るも。なかもとより大雨の意ヒなるト。
氷雨の意ヒなるトの異ヒあることを。ヒ。き。ま。へ。さ。る。ひ。が。こ
と。なり。詞の轉るも。そのよこそよれ。氷の降るを。多ヒ。雨
の甚くふること。と轉ヒいふ如きことハ。以ヒてあらむ。
又飛鳥宮段ヒ。氷雨を。歌ヒ。阿米ヒとよめるを。阿米ヒハ。惣名
なれば。氷雨をも。何雨をも。此類のも。比ヒ。皆阿米ヒといふ

むよ、何のあがへることあるべき。月八巻、
 ひづちのひぢ、ビツタリトヲラシ
 二、卷^{卅一}、玉垂^{タケレ}乃越^{ノチ}乃大野^{ノオホ}之旦露^{ノアサツユ}尔玉藻^{ニタマモ}者^ハ埜^{ビツチ}打^チ夕霧^{ニラギリ}
 尔^ニ夜者^ハ沾^{スレ}而云^テ、十五^ノ、安佐^{アサ}都^ツ由^ユ尔^ニ毛^モ能^ノ須^ス蘇^ソ比^ヒ都^ツ
 知^チ云^ク、十七^ノ、波流^ハ佐^サ米^メ尔^ニ、保^ホ比^ヒ豆^ヅ知^チ底^テ云^ク、あ
 とあるハ、ビツタリトヲラシと云ことあり、埜字を書こ
 るよつきて、埜よ漬て活ること、思ふことなれ、雨露
 涙などをたぬめ、何よも甚く濕ることよいへり、そもく
 此言を比豆^{ヒヅ}とも比治^{ヒヂ}とも常よいふを、比豆^{ヒヅ}知^チとも、比豆^{ヒヅ}
 追^ツとも活^カるを、知^チ追^ツの言ハ、その形容^{サマ}を云言^ハて、龍^{タケ}を、多^タ

藝^ギ知^チ多^タ藝^ギ追^ツとも、黄^モ色^シを、毛^モ美^ミ知^チ毛^モ美^ミ追^ツとも云よ、全同ト
 ことなり。
 ひとよ、下ヒラ
 八、卷^{卅二}、此^{コノ}花^{ハナ}乃^ハ一^{ヒト}與^ヨ能^ノ内^ニ尔^ニ百^{ヒャク}種^{シュ}乃^ハ言^フ曾^{ソウ}隱^{イン}有^ル於^オ保^ホ呂^ロ可^カ
 尔^ニ為^ス莫^ナ又^サ、此^{コノ}花^{ハナ}乃^ハ一^{ヒト}與^ヨ能^ノ裏^{ウラ}波^ハ百^{ヒャク}種^{シュ}乃^ハ言^フ持^チ不^フ勝^セ而^{シテ}所^ヲ
 折^エ家^ケ良^ラ受^ズ也^ヤとあるハ、一^{ヒト}辨^{ビラ}のことなり。
 ひとめ、ヒトオメ
 十二^ノ、里^{サト}近^{チカ}家^ケ哉^ヤ應^{オウ}居^キ此^{コノ}吾^{オノ}目^メ之^ノ人^{ヒト}目^メ乎^ヲ為^シ管^ツ戀^{コイ}繁^{シゲ}口^クと
 ある、人目ハ人オメの意ときこえたり、源氏物語よ、面ぎ
 らひをると云よ全同ト。

ひのこて 東西

一、卷^{廿三} 日本^{ヤマト}乃^ノ青香具山^{アヲカガヤマ}者^ハ日經^{ヒノタテ}乃^ノ大御門^{オホミカド}尔^ニ青山^{アヲヤマ}跡^ト之美^シ佐備^{サベ}立有^{タテリ}云^ク。これハ香山ハ東の御門^{ミカド}ニむゝへる
の故^ユといへり。成務天皇^{ナリノ}紀^キニ隨^{マニ}阡陌^{センボク}以^テ定^ム邑里^{イセ}因^テ以^テ東西
為^シ日縱^{ヒノタテ}南北^{ナノ}為^シ日橫^{ヒノヨコ}といへり。本朝^{ホノ}月令^{ツキノ}ニ高橋氏^{タカハシノ}文^{フミ}云^ク。日
豎^{タテ}日橫^{ヨコ}陰^{カゲ}面^{オモテ}背^{サト}面^{サト}乃^ハ諸國^{シヨクニク}人^{ヒト}乎^{ナラ}云^ク。和名抄^{ワナヒナヒラキ}ニ唐韻^{タウオン}云^ク。道路
南北^{ナノ}曰^ク阡^{セン}多^タ知^チ之^シ乃^ハ美知^{ミチ}曰^ク。東西^{トシ}曰^ク陌^{ボク}与^ヨ古^コ之^シ乃^ハ美知^{ミチ}とある。
此^{コト}ハ漢國^{カンクニ}にてハ東西^{トシ}為^シ陌^{ボク}南北^{ナノ}為^シ阡^{セン}といひさて南北^{ナノ}を
天地^{アメノチ}の經^ノとシ東西^{トシ}を天地^{アメノチ}の緯^ノとせることなれば南北^{ナノ}
は多^タ知^チ之^シ東西^{トシ}は與^ヨ古^コ之^シと注^シせるハ彼國^{ソノ}の定^ムハ叶^フひ

て宜^シしければ皇朝^{スミヤカノ}の古^コハ右^{ミダリ}ニ云^フる如^ク東西^{トシ}を日縱^{ヒノタテ}と
し南北^{ナノ}を日橫^{ヒノヨコ}と定められとるよとむひとれば南北^{ナノ}の
下^シハ與^ヨ古^コ之^シ乃^ハ美知^{ミチ}東西^{トシ}の下^シハ多^タ知^チ之^シ乃^ハ美知^{ミチ}と注^シすべ
きことよこそあれ但^シ日本紀^{ニッポンキ}などに阡陌^{センボク}とあるをタ
タサ^タノミ^ミチ^チヨコ^コサ^サノミ^ミチ^チと訓^スとるそれもさかへるが
如^クなれども彼^{ソノ}ハ山海^{シヤウカイ}とかきてウ^ウミ^ミヤ^ヤマ^マと訓^ス晝夜^{シヤクヤ}と
かきてヨ^ヨル^ルヒ^ヒと訓^ス類^{ルイ}にて彼國^{ソノ}にてつらねられと
るまゝに書^キさて字面^{ジヘン}ハ拘^クらずして御國^{ミツクニ}言^フのまゝよ
訓^スるものあればさのことむべきは非^ズず。

ひのよこ 南北

心一巻丁廿三二畝火乃此美豆山者日緯能大御門尔弥豆山
 跡山佐備座云云これハ畝火ハ西の御門ニ當りたるを
 かく云るなり然るハ日緯とハ南北をいふ称なれば西
 門を云べきよあらざるがごとくなれども既ハ影面背面
 日經ヒよて南門北門東門のことを云畢されバ今も西門
 のことならでハ云べき御門なく又ひとり西の門を除
 べきよあらざれバ日緯の言をやとひて西の御門を云
 るあり日經日緯影面背面の言をもて一首を志とてと
 れバ日緯のみを云もらすべきよあらざればこの言を
 西の御門よやとひとるものなりと知べし西も日緯も

ひむヒヨウヨウ 将戀と云ハカヒヨウオヒム 将生と云ハオヒヨウと俗ニ云ハ
 同ト将和将荒など云ビムもニキビヨウアラビヨウと
 云意よて同ト
 ひるニニク
 十六丁十八二 醬酢尔蒜都伎合而鯛願吾尔勿所見水葱乃
 煮物とあり應神天皇紀大御歌ニ伊装阿藝怒珥比蘆菟
 彌珥比蘆菟彌珥云くとも見ゆ今俗ニニクと呼で
 ○ふ部
 ふヘル

仕布ハ俗ヨツカヘルといふこと、傳布ハ俗ヨツタヘル
といふことなり。

ふさ○ふすさ フツサリ 餘計 タクサン

八卷^{廿七}射目立而跡見乃岳邊之瞿麥花總手折吾者
持將去寧樂人之為十七^{十七}秋田乃穗牟伎見我底利
和我勢古我布佐多乎里家流乎美奈蔽之香物などある
を俗ヨフツサリ又ハ餘計又ハタクサンなど云意な
凡十四^{廿三}安佐乎良乎遠家尔布須左尔宇麻受登毛
安須伎西佐米也伊射西乎騰許尔とある布須左も同言
なるべし宇津保物語鶴子父君志とふさよかけつ

國讓よところよりをかときものどもふさよとてま
つれさまへり大和物語よとつみと人や見るらむあ
ふことの名みどをふさになきつめつればかげろふ日
記よりこや何やとふさよあり云く源氏物語枕冊子
等よふさやると云詞の見えさるも同意なり

ふさつな一 ムルイナ

三卷^{四十}伊奈太吉尔伎須賣流玉者無二此方彼方毛
君之隨意十三^{十五}二無戀乎思為者常帶乎三重可結
我身者成などある無二とさぐひな一と云むが如く俗
よムルイナと云ことあり

羽とあるハ、俗ニ云フルナジミのことなり。

振りさけ フリアフムク フットハルカニ

振放見者などいふを、フリアフムキテ見レバ、又ハフツ

トハルカニ見レバと云意なり。

ふるす フルイモノニスル

七卷 一 照左豆我手尔纏古須玉毛欲得其緒者替而

吾玉尔將為古今集、鶯の去年のやどりのふるすとや、

云くなどあるハ、フルイモノニスルといふ意なり。

ふる ○ふれ べル 曾市太志 半 曾 眞 誠 太

仕留ハ俗ニツカヘル、數留ハ俗ニカズヘルといふこと

なり、布礼も許曾のか、その結の異なるのみよて、譯言
を同じ、

○へ部

への ○へかも へバニヤ へバカシテ

云敞可思敞可などいふを、イへバニヤオモへバニヤ、或

ハイへバカシテオモへバカシテと云意なり、いづれも

これらよ准知べし、○云敞可母思敞可母など、母の辞此

をとりさるも同意よて、母ハマアといふよあさる歎息

辞なれば可とのみ云さるより、はくとしきかさるり、十

三九 念戸鴨胃不安戀列鴨心痛云とあるハ、オモへ

バカシテ胃ノ安カラヌ云々。サテモマアジユツナイコトヤ。と云歎息の意を含ませとるあり。いづれもこれに准べし。

へつあふ へッラフ

四卷^丁 ^{廿八} 絶常^ト云者^ハ和備^ワ漆^シ責^セ跡^ト燒^ヤ太^タ刀^チ乃^ノ隔^ヘ付^ツ經^キ事^{コト}者^ハ幸也^{ウラシマ}吾^ワ君^{ギミ}の誤^{アヤマ}なり。とあるハ。へッラフテウハベニハ。此方ニ親^ウウ依^ツタヤウニ見^セテ信實^ニ依^ツタニハアラヌコトハ。サテくニかくシイコトゾとなり。付^ツ經^キハ都^ツ良^ラ布^フと通^スへり。色^ノの丹^ニ都^ツ良^ラ布^フを。丹^ニ都^ツ可^カ布^フともいふと全^ラ同^ト例^レなり。七^チ卷^セ ^{四十} 殊^{コト}放^{サカ}者^バ奥^{オキ}從^ヨ酒^{サカ}嘗^{ナム}湊^{ミナト}自^{ヨリ}邊^ヘ着^ツ經^キ時^{トキ}尔^ニ可^サ放^サ鬼^{モリ}

香とあるハ言ハ同トことなるがら。さうに海邊は着をいひて。今とていさゝの異れり。

へむ へヨウ

將^ダ堪^{ヘム}と云ハ夕^タへヨウ。將^ラ終^ムと云ハヲへヨウ。將^{コタ}答^{ヘム}と云ハコタへヨウと俗^ニ云^フハ同^ト。將^{ナラ}並^{ナム}など云^フベムも。ナラベヨウと俗^ニ云^フ意^ニよて同^ト。

へろ へれ 夕

結^ユ有^レハユウタ。思^{オモ}有^{ヘル}ハオモウタといふ意なり。弊^ヘ礼^レも。許^コ曾^{ソウ}のかゝりの結^{ムス}びの異^ヘなるのみよて。譯^{ヤシ}言^ハ同^ト。

○ほ部

ほとく ヒョツトシタリヤ アブナイコト

三卷^卅 吾^{アガサカリ}盛^{マタラチメ}復^ヤ將^モ變^{ホリニナ}八^ラ方^{ミヤコ}殆^ヲ寧^{ミズ}樂^{ナリナム}京^カ師^{ナム}乎^ナ不^カ見^{ナリ}歟^ナ將^ナ成^{ナム}と

あるハ、ヒョツトシタリヤ、モウ寧樂ノ京師ヲ、ヨウ見ヌ

ヤウニナラウカと云意なり。七卷^{四十} 燎^{タギ}木^キ伐^{キリ}殆^{ホリ}之^シ國^{クニ}。

手^テ斧^ヲ所^ト取^ラ奴^ハとあるハ、アブナイコト、手^テ斧^ヲヲ^トラ^レラ^ツ

夕^タと云意なり。八卷^{四十} 不^ミ令^セ見^ズ殆^{ホリ}令^{ホリ}散^チ都^チ類^ラ香^カ聞^モとあ

るハ、アブナイコト見^セズニ^チラ^シツ^ツ夕^タと云意なり。

十卷^{廿三} 霍^{ホト}公^{キス}鳥^ス保^{ホト}登^ト穂^{ホト}跡^ト妹^{イモ}尔^ニ不^ア相^ハ來^ズ尔^ニ家^ケ里^リとある

ハ、アブナイコト女^ニヨウ^アハズニ^來ヲ^ツ夕^タと云意な

リ。拾遺集^ニ歎^キこ^ろ人^イる^山の^斧比^柯の^ほとく^{とく}

もむなりまける哉、源氏物語^ニ翁^もむ^むとく^く舞^出ぬ^べき^な

どあるも、みれ同意なり。本居氏云、富^{ホト}登^トこ^こといふ言^ノ

意^ハ邊^{ホリ}こ^こよ^て其^近き^邊ま^で至^ル意^{ナリ}といへり。

ほどろく バラク^く チラク^く

八卷^{五十} 沫^{アワ}雪^{ユキ}保^{ホト}杼^ド呂^ロく^くく^く尔^ニ零^{フリ}敷^シ者^ガ平^ナ城^ラ京^{ミヤ}師^コ所^オ念^モ

可^カ聞^モとあるハ、バラク^く或^ハチラク^くと切^キ離^レて^ふる^をい

へり。

ほとく^くに^き子^ムガ^フタ^クシ^タ

十五^{卅七} 可^カ敞^ヘ里^リ家^ケ流^ル比^ヒ等^ト伎^キ多^タ礼^レ里^リ等^ト伊^イ比^ヒ之^シ可^カ婆^バ保^ホ

等^ト保^ホ登^ト之^シ尔^ニ吉^キ君^キ香^カ登^ト於^オ毛^モ比^ヒ豆^トとあるハ、胸^{ムネ}ガ^フタ^クト

シタと云ことあり。

ほびこり ハビコリ バビロクスル

十八冊三 許能美由流久毛保妣許里豆等能具毛理安

米毛布良奴可許己呂多良比尔とあるハ、雲ハビコリテ

と謂なり。俗ハバビロクスルといふ意なり。

ほ、か、は、ホウノキ

十九冊四 吾勢故我捧而持流保寶我之婆安多可毛似

加青蓋又同皇祖神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布

曾此保寶我之波などあり。今俗ハホウノキと叫り。言ハ

ほよヤドリキ

十八冊七 安之比奇能夜麻能許奴礼能保與等里天可
射之都良久波知等世保久等曾とあり。後ハ保夜とい
へり。今俗ハヤドリ木と呼むのこれなり。

ほろよふみあこー バラクトフミチラシアバレル

十九冊三 天雲乎富呂尔布美安多之鳴神毛今日尔益

而可之古家米也母とあるハ、天雲ヲバラクトフミチラ

シアバレテナル。と云意ときこえり。

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、

